



甲虫ニュース

No. 134
July 2001

COLEOPTERISTS' NEWS



黒澤良彦博士 (1921-2001)

黒澤良彦博士追悼号

Dr. Yoshihiko KUROSAWA Memorial Issue

追悼記事目次

- 黒澤良彦博士のご逝去を悼む 大林延夫——2
黒澤さんを偲ぶ 石川良輔——2
中華どんぶり 青木淳——3
ミクラミヤマクワガタ採集行の思い出 渡辺泰明——4
黒澤良彦先生を偲ぶ 岡島秀治——4
博物学者としての黒沢先生、その先生に育てられた私 高桑正敏——5
アオ研の頃 新里達也——6
黒澤良彦博士を偲んで 多摩夢子 (佐々治寛之) ——7
黒澤さんの逝去を悼む 佐藤正孝——8
偉大なる虫好き 酒井 香——8
黒澤先生の思い出 川田一之——9
黒澤先生に頂いた別刷 妹尾俊男——9
クロサワミヤマクワガタ台湾省新竹県の記録 境野広行——10

黒澤良彦博士のご逝去を悼む

大林 延夫

今年2月27日、本会の名誉会員、黒澤良彦博士が亡くなられた。享年79歳。黒澤博士は、既に本誌の前号に渡辺泰明先生が記されているように、「甲虫談話会」および本誌「甲虫ニュース」の生みの親であり、鞘翅学会の重鎮として多くの虫屋を育てた大先達である。その研究業績については、1986年に甲虫談話会から出版された退官記念論文集に詳しい。また、その人となりについては、まさに「虫好き、虫きち、虫屋」などの呼び名にもっともふさわしい方であったというのが衆目の一致するところであろう。

黒澤博士の略歴について、先の退官記念論文集巻頭に書かれた大和田守博士の名文から引用させていただければ、次のようになる。1921年、東京に生まれた博士は、父君のお仕事の関係で山形県米沢に移り住み、自然と親しみながら小学生の高学年になると既にチョウの収集を始めていた。中学時代には外国産のチョウを交換で集め、また、「昆虫界」に報文を発表するなど、既にいっばしの虫屋として活動し、1940年に山形高等学校に入学すると、ますます昆虫熱が高まったという。

1943年に九州大学農学部昆虫学教室の研究助手として職を得、研究室での仕事としてはノミの飼育をしながら、当時の江崎悌三教授、安松京三助教授の指導の下にタマシシの分類学をライフワークと定めたことと記されている。

第二次大戦が終わり、一時父君の郷里の会津若松に帰っていた博士は、1951年の夏に東京の国立科学博物館に奉職し、以後1986年に動物研究部長として退官を迎えるまで、およそ35年の長きに亘って、タマシシを始めとして様々な分類群についての研究の傍ら、博物館のコレクションの充実と、多くのアマチュアの昆虫学者の指導にあたってきた。

黒澤さんを偲ぶ

石川 良輔

初めて黒澤さんにお目にかかったのはもう半世紀も前のことである。ある虫屋の集まりで紹介された黒澤さんは、国立科学博物館の昆虫研究室に、急逝された新村太郎氏の後任として着任されたばかりであったが、初対面の私にも気さくに、博物館に遊びに来るようにと誘われた。以後、私は度々、黒澤さんの研究室を訪れる事になる。何時行っても笑顔で迎えられ、虫談義に花が咲いた。黒澤さんは人ぞ知るタマシシの専門家である。甲虫や蝶には特に造詣が深かったが、あらゆる昆虫に興味があり、博物館に古くから所蔵されている標本を整理し、また、新しい標本をせっせと作っておられた。そして、どん

人は黒澤博士を称して、「アオスジタテハ」、「クロサワカミナリハムシ」などという。しかし私の博士に対する印象とはずいぶんイメージが違う。無論このあだ名も博士に対する親しみから出た逆説的な愛称?であろう事は想像に難くない。研究室に伺うと、いつもうれしそうなお顔で、「大林君、これ君持っているかい?」などといってカミキリムシの美麗種が詰まった標本箱を持ちだしてくる。インドネシアのアオカミキリの珍品の紙包みをどこかから出してきて、「これあげるよ」と惜しげもなく渡されたり、「これ読んだか?」と別刷を出していただいたりした。当時カツオブシムシを研究していた私は、中根さんに文献を拝借したりご意見を伺うために博物館に出かけることが多かったが、真っ先に黒澤さんの部屋に寄ることを楽しみにしていたものである。

私が黒澤博士を黒澤さんと親しく呼ばせていただけるのは、博士と私の父との親交のおかげである。たぶん、息子のような気持ちで接していただいていたのだと思う。父が他界してから何年か経った頃、「君のお父さんのタマシシのコレクションの中に、自分が持ってない標本があるので見せてくれないか」と黒澤さんから電話があった。父は晩年の頃、当時ラオスに在住していた J. RONDON 氏とカミキリムシの標本を交換していたが、同時にタマシシ屋の A. BAUDON 氏とも交換をしていて、これをずいぶん黒澤さんに自慢していたらしい。大きな標本箱を持参して我が家に來られた黒澤さんが、嬉々としてこれらを抜いておられた顔を思い出す。まさに「虫きち」の虫屋の顔であった。同じ虫屋であった父のおかげで、子供の頃からかわいがっていただき、ご指導いただいた大先輩の虫屋さんの訃報に接することが多くなったこの頃、またお一人幽明境を異にし、悲しい思いをしている。博士のご冥福をお祈りするとともに、ご遺志に報いるためにも鞘翅学会のますますの発展をお誓い申し上げる次第である。

(日本鞘翅学会会長)

な標本でも積極的に貰い受けて研究室の資料を増やす努力を惜しまれなかった。国立がんセンターの所長であった中原和郎先生が、当時、日本最大の華麗蝶のコレクションを博物館に寄付されたのも黒澤さんの熱心な収集活動に共感されたためと聞いている。国立科学博物館の昆虫研究室の基盤は黒澤さんの努力によって築かれたと言ってもよい。黒澤さんは研究室を訪れる若い愛好者の指導にも熱心であった。だが、当時の国立科学博物館は組織としては現在のように独立した研究部門がなく、昆虫研究室は学芸部に属していて、予算的にも非常に貧しい状態であった。黒澤さんのご苦勞はかなりのものであったに違いない。ところが、その博物館に私が就職するめぐりあわせになったのである。それは1965年(昭和40年)の春で、国立科学博物館の組織が変わって研究部が設けられ、動物研究部には昆虫研究

室ができたからである。数年前に上野俊一君が就職して脊椎動物の研究室に所属していた。新しい昆虫研究室は定員4名で、黒澤さんと西京大学（現京都府立大学）から来た中根猛彦さん、少し遅れて一緒に入った青木淳一君と私の4人で発足した。しかし、黒澤さんの不満ははた目にも明らかだった。黒澤さんにとって、自分が長年育ててきた昆虫研究室の室長に今まで博物館とは何の関係もなかった中根さんが納まったことはどうにもやりきれなかったに違いない。しかも、昆虫研究室の4名のうち、青木君はダニの専攻であるから実質的に昆虫研究者は中根、黒澤、石川の3名しかいない。一本気な黒澤さんは中根さんへの反感を隠そうとしなかった。標本の整理も含めて、全てにわたって今までの自分のやり方を変えようとはしなかった。中根さんも黒澤さんが煙たかったらしく、まともに話し合おうとしなかった。このために、当時の昆虫研究室は組織としては殆ど機能しない状態にあったと言ってよい。間に立った私は大変だった。でも黒澤さんとは何のわだかまりもなく、私が勤務した10年の間、何時も二人で行動することになった。採集にも一緒にいった。私の車でかけたことも度々である。とくに百人町に移転してからは同室になったので、毎

日、午後3時になると仕切りの向こうから「石川君、お茶にしよう」と声がかかるのであった。黒澤さんが紅茶をいれる馴れた手つきが昨日の事のように目に浮かぶ。こうして虫を語り、分布を論ずるひとときが始まるのであった。

私が東京都立大学に転出することになった時、黒澤さんは非常に喜んで下さった。1975年の春、後ろ髪を引かれる思いと、気疲れな人間関係の狭間から逃れられる解放感の交錯する複雑な気分では博物館を離れたのである。黒澤さんは初対面の時と同じように「いつでも遊びに来いよ」と言われた。だが、これが黒澤さんとの別れになってしまった。大学での新しい生活は意外に多忙で、博物館に在職中の黒澤さんにゆっくり話しに行く機会が殆どなくなってしまったからである。

黒澤さんと毎日顔を合わせ、虫談にふけり、議論を戦わせた10年間、それは私の人生の中でも最も夢の多い時期であった。今でも黒澤さんの笑顔が私に話しかけてくる。心底から昆虫好きの黒澤さんは亡くなる直前まで採集の話をしておられたとか。きっと捕虫網片手にあの世に旅立たれたに違いない。生前の交誼を偲んで、心からご冥福を祈る。

(東京都渋谷区)

中華どんぶり

青木 淳一

私は、「もと虫屋」である。その虫屋の時の思い出は、黒沢良彦先生の思い出と重なっている。学習院の中等科で生物班を作り上げ、慶応中等部にいた今は亡き西川協一君と少年昆虫同好会（のちの京浜昆虫同好会）を盛り上げていた頃、二人でよく国立科学博物館へ黒沢先生を訪ねた。アルバイトで行ったこともあるし、ただ遊びにいったこともあったように記憶している。

ぼくらがいきなり訪ねていっても、先生は嫌な顔一つせず、多分その時、ご自分が一番興味を持っておられた標本を持ち出して、楽しそうに説明して下さい。たとえば、一見つまらなそうに見えるチビタムシの類でも、先生の説明を聞いていると、その銅色の体のわずかな色合いや輝きの違いに目を見張ってしまうのだった。また、虫の下に付けられたラベルに書かれた自筆の文字の美しさは、なんともいえなかった。あんなに小さい文字を、あんなに細いペンで、あんなに美しく書く人を見たことがなかった。

私が好きだった甲虫が益々好きになってしまったのは、黒沢先生自身の親切な接し方にもよるが、貸していただいたREUTERのFauna Germanica（ドイツの甲虫モノグラフ）のせいでもあった。とくに私の目を釘付けにしたのは多数の種のケシキスイとホソカタムシの精巧極まる原色の図であった。のち

に、私がホソカタムシだけに凝り固まったきっかけが、これであったように思う。立ち枯れの木を好み、ゆっくりと動き、体の両側が平行で、色彩は地味でも、いかにも甲虫らしいきっちりした体型、表面のざらついた彫刻。これらの特徴は後に私が専門に研究することになったササラダニ類にとてもよく似ていた。

私がハワイのピショップ博物館から呼び戻されて国立科学博物館に勤務したとき、昆虫の部門には黒沢先生の他に上野俊一先生が居られ、私と同時に石川良輔先生が来られた。そして何年後に中根猛彦先生が来られた。それぞれに強烈な個性の持ち主であったので、私もいろいろと勉強させていただいた。A先生の言ったことをB先生に伝えるときは、決してその言葉どおりに伝えてはだめで、私なりに苦労して考えた「ふんわりした言い回し」に変換して伝えることも覚えたが、正直言って疲れた。

黒沢先生のいいところは、自分に正直であり、決して飾らず、見栄をはらず、人が困っているときは親身になって心配して下さったことである。人間的にやや弱いところがあるのも、好きである。そして、いつも真っ白なワイシャツにグレーのスーツを長身にまとい、たいへん身嗜みがよい方であった。

黒沢先生、覚えていますか。お昼はいつも、先生も僕も上野公園内にある東京文化会館食堂の中華どんぶりでした。私もはや大学を停年退官し、また博物館勤務に戻ってきました。そんなことで、黒沢先生のことを何時も思い出しています。

(神奈川県立生命の星・地球博物館館長)

ミクラミヤマクワガタ採集行の思い出

渡辺泰明

私が初めて黒澤良彦博士のご警咳に接したのは、東京農大の二年生の1954年であった。この年の1月に、博士の主唱によって甲虫談話会が創立されて、上野の科学博物館で開催された月例会に参加した折である。その後、私は1967年からこの会の運営のお手伝いをする事になり、さらに、その翌年に創刊された「甲虫ニュース」の編集にもたずさわることになってからは黒澤博士とひんばんに接する様になり、色々な面で啓蒙される事が多かった。また、1984年には山と溪谷社から野外ハンドブックシリーズの1分野として「甲虫」の出版が企画され、その解説を黒澤博士と私とで担当することになり、そのための取材や執筆を通して多くのことを学ばせて頂いた。この様に、黒澤博士からは長年に亘ってご指導ご厚誼を頂き、振り返れば様々な思い出が走馬灯の様に次から次へと浮かんでくる。それらの中で、最も印象深い思い出の一つとして伊豆御蔵島へミクラミヤマクワガタを採集しに行ったことがあげられる。

東京都文化財総合調査の機会に御蔵島からクワガタムシの未記載種が発見され、それを1960年に澤田玄正先生と私とで、*Lucanus gamunus* と命名し、記載発表した。その折、クワガタムシに関し造詣の深い黒澤博士から有益な助言を頂いたが、博士はクワガタを直接ご自身の手で採集したいとの希望を述べられた。そこで、1967年私は当時東京農大の学生で昆虫学研究室に所属していた高橋慶二郎君を誘い、このクワガタを採集するため黒澤博士と三人で御蔵島へ行くことにした。

東京都の調査から8年後の御蔵島は大きく様変わりしていて、御蔵島唯一の集落である里の海岸にははしけが横付けできる桟橋が構築され、船付場から里の集落までは自動車が登れる様に勾配のゆるやかな道路が整備されていた。島に上陸後「きよや旅館」で一泊した後、ミクラミヤマクワガタを採集できる可能性が高いと思われた川田に向かった。川田には発電所があって、その施設に泊めて頂き周辺を採集する計画である。川田への途中、私は太陽に照りつけられた路上で、アリの攻撃を受けもがいているミクラミヤマクワガタを見つけた。これで、このクワガタの成虫が出現していることが確認できたので案内役の私としてはほっとした。しばらく歩いた後、今度は黒澤博士が路上を歩いているこのクワガタを見つけたが、この時の博士の嬉しそうな顔が未



御蔵島御代が池にて：黒澤博士(右)と高橋君(左)。

だに印象深く私の脳裏に刻み込まれている。この様にミクラミヤマクワガタがいずれも路上で発見されたことから、私達はひたすら路上に目を走らせクワガタを見つけるのに専念した。川田の発電所で荷物をおろした後、各自思いおもいに周辺を採集して歩いたが、黒澤博士は林間の小径を精力的に歩き廻られ、予期以上の個体数を採集されていかにも満足気な様子だった。そこで、クワガタ採集という所期の目的は達したので、川田周辺での採集をいったん切り上げ、これまで全く調査されていない御代が池周辺を採集することにした。そこで、この池に近い今では廃村になっている南郷に行き、住人不在の家で一泊させて頂いた後池に向った。しかし、南郷から御代が池までは道はない。このため、黒澤博士が五万分の一の地形図を読み取りながら歩き難い林の中を進んで行き、ようやくの思いで御代が池に到達することができた。しかし、道なき道を歩き、時にはオオミズナギドリ(オオミズナギドリ)の巣穴を踏み抜いて膝まで土中にはまり込むことも再々あったことが影響してか、黒澤博士は膝を痛めた様だった。博士は学生時代、スキーで転倒した際膝を痛め、以後無理をすると膝の関節に水が溜って痛みが再発することだった。しかし、池の周辺の随所で花開いているエビネの中で、純白の花弁のエビネを見付けられた時には博士は膝の痛みも忘れたかのように、その気品に満ちた花に見入られていた。この様にして、ミクラミヤマクワガタ採集の目的を達したばかりか、沢山の気品に満ちたニオイエビネの花に接することができて、私達は15日間の御蔵島での生活を堪能することができた。そして、私はこの採集行を通して、黒澤博士の博覧強記振りに感心させられながら、多くのことを学ばせて頂いたことに心から感謝している。

(東京農業大学昆虫資源学研究室)

黒澤良彦先生を偲ぶ

岡島秀治

高校時代までを大阪で過ごした私は、黒澤図鑑の

代表格であった「世界の蝶」(北隆館、中原和郎氏と共著)で蝶の世界のにめりこみ、学校の図書室に通って、そのすばらしい蝶の原色プレートを見てはため息をついていた。図鑑そのものも高価であったし、何よりもその図鑑でしか見たことのない珍しい

蝶ばかりが掲載されていたのである。いつしか先生のお名前を覚えてしまったが、当然蝶の専門家としてであった。先生が蝶だけでなく甲虫、特にタマムシの研究をされているのを知ったのは、大学に入学してからのことであった。私も蝶以外に甲虫にも興味を持つようになり、友人に誘われて「甲虫談話会」に出席したときのことであった。なんと談話会を主催されている背の高い紳士が黒澤良彦先生であったのには驚いた。しかも、その後縁あって先生と色々な形でお付き合いいただくようになるとは、そのときは予想もしなかった。

それは確か大学3年の頃であったと思う。当時、上野の国立科学博物館本館に勤務されておられた黒澤先生を、初めてお訪ねしたおぼろげな記憶である。その頃、大学で昆虫学を専攻した私は、すでに研究テーマを蝶でも甲虫でもないアザミウマにしようと決めていたのであるが、蝶や甲虫に対する興味も持ち続けてはいた。そんな折、当時御指導を仰いでいた渡邊泰明先生が黒澤先生をお訪ねになると言うので、無理を言っていっしょに連れて行っていただいたのである。そのときの自己紹介で蝶や甲虫が好きであるが、大学ではアザミウマの研究をしようと思っていることをお伝えすると、先生は「黒澤違いな」と言って笑われたのを今でも鮮明に覚えている。アザミウマの研究をされていた故黒沢三樹男博士のことを言われたのである。残念ながらそれ以外の会話の記憶はすでにない。ともあれそれが先生と交わした初めての会話であった。その後、先生のところで標本整理のアルバイトをしたり、なぜか甲虫談話会の機関誌「甲虫ニュース」の編集を任せられたり、先生には特に親しくしていただいた。採集旅行にもよく同行させていただいた。1982年の夏、山梨県の三ツ峠山に同行させていただいたとき、当地にキベリカタビロハナカミキリが多産することを発見したのだが、それをノリウツギやイケマの花から採っている時に真っ黒のフタコブルリハナカミキリをいくつか得た。先生は「ひょっとするとこのアオジョウカイは黒いのかも知れないよ」とおっしゃりアオジョウカイを探すように言われた。フタコブルリはアオジョウカイにベーツ型の擬態をしているのご推測からであった。はたして個体数こそ少なかったが、採集されたアオジョウカイはどれも真っ黒であった。5-6月に多く見られるクロジョウカイと見まがうほどであった。その折、先生

から興味深い擬態のいろんな仮説をお聞きしたが、後に保育社の原色日本甲虫図鑑(I)にその時得られた標本とともに解説されておられる(P21, P129-130)。今でもその標本写真や解説を見ると、先生とともに各地を採集して廻り、いろんな興味ある昆虫のお話を聞かせていただいたことを、つい最近のように思います。先生はよく「博物館は研究するには良い職場だが、後継者を育てるシステムに欠けている」と言った意味のことをおっしゃっておられた。そのためか、当時昆虫学を志していた学生や大学院生を大切にされていたし、年齢を問わず在野の同好者との交流を大切にされた。甲虫談話会を主催されておられたことでもその一端が垣間見れると思う。よく、先生は「クロサワカミナリハムシ」とか「アオスジタテハ」とやゆされたが、確かにそういう一面はあり、否定しないが、それ以上に私たちを大切にしてくださいました。また、博物館をリタイヤされたからは、その頃私が勤務していた東京農大の世田谷キャンパスを時折お訪ねになられた。農本町のご自宅から近かったし、「老人パス」でバスに乗って来たよ」と笑いながら来られ、たいいはいはJunkのカatalogなどの文献調査をされていた。研究のじゃまになるからと、お茶などをお勧めしても、強くご辞退される事が多く、かえって恐縮したことを思い出す。私たちは先生が現役の頃、先生の研究室を訪れては、あつかしくもどっかと座り込み、いつまでも話し込んで先生の研究のじゃまをしていたのである。1999年の12月だったと思うが、思いついて家内と先生のご自宅にお見舞いに行った。先生はその頃入退院を繰り返しておられると聞いていたのだが、ご自宅におられるらしいとの情報を得たので、思い切って行ってみたのである。ちょうど奥様はお出かけで、玄関をあけて出てこられたのは先生ご自身であられたのには驚いた。そのうち帰宅された奥様ともどもことのほか喜んでくださり、しばらく話し込んでしまった。また、その1ヶ月後の2000年1月にもお伺いしたが、生身の先生とお会いしたのはそれが最後となってしまった。先生は「後継者を育てるシステム」こそ持っておられなかったが、それでも多くの後継者を育てられたと思う。私は先生の足元にも及ばないが、先生の後継者の一人としてここに名乗りをあげておきたいと思う。

最後に、我が師である黒澤良彦先生のご冥福を心よりお祈りしたい。(東京農業大学農学部)

博物学者としての黒澤先生、
その先生に育てられた私

高桑正敏

黒澤良彦博士が、この2月に他界へと旅立たれてしまった。先生のご病気は伺ってはいたが、学生時代から何かと目をかけていただいていただけに、万感迫る思いがある。

私は甲虫ニュースに育てられたと本誌100号記念に記した。その甲虫ニュースの創始者の1人であり、長く主宰されてきたのが黒澤先生であった。「高桑君、どんどん原稿を書きなさい」と勧められるままに原稿をお持ちすると、その場ですぐ添削してくださった日々がなつかしい。また、昆虫に関するいろいろな知識を授けてくださったばかりか、お手持ちのハナノミの別刷や標本を恵んでくださったり、記載文を書くなら「昆虫学術語辞典」(石田, 1933, 丸

善)を座右に置いていたほうがいいと、蔵書をまるまるコピーさせてくださったりもした。辛口の批評をされることがあったせいか、怒ると怖い先生だという評判があり、じっさい何かのときだったかその片鱗を垣間見たこともあったような気がするが、私にはとても優しく親切で、ときには飲み連れで行ってくださったたりした。甲虫ニュースに育てられた、と記したが、私は実際には黒沢先生によって育てられたと言うべきかもしれない。

先生が生涯かけて分類学的な研究の対象とされてきたのは、もちろんタマムシ科である。しかし、興味をもたれた分類群はそればかりでなく、甲虫以外の多くの目(たとえば鱗翅類からトンボ類、同翅類、双翅類、膜翅類、直翅類など)にも渡っていたように思う。研究室にお邪魔すると、どうだと言わんばかりに「これなんかなかなかいいだろう」と展翅・展脚中のそれら美しい標本を見せてくださったものである。とくにお好きだったのが大型種や美麗種、擬態種、あるいは奇抜な形態をもった種であったことは間違いないだろう。足腰を弱くされてからも、インセクト・フェアなどの即売会においてになり、出品された標本を熱心に眺めておられた。

分布地理学的な考察もひときわ好きだった。ごく狭い地域から広大な地域に関連したものまで、また特定の種から広範な分類群を扱ったものまで、分布地理に触れた論文は多数にのぼる。なかでも、古伊豆半島の成立を想定した分布論は説得力があって、じつに興味深いものだった。私自身それを読み、また先生からお話を伺ううちに、すっかり伊豆諸島のおもしろさに引き込まれてしまい、伊豆の島々に

足繁く通うことになったのだと思う。古伊豆半島説は地史の分野からはいまのところ否定的だが、ミクラミヤクワガタはじめ、そう考えなければ伊豆諸島での分布を説明しづらい生物が少なからず存在するのも事実である。

擬態など収斂現象について語られることもしばしばで、その鋭い視点に何度も感心させられたものである。たとえば、八重山諸島におけるシロオビアゲハのベニモン型雌の増加がベニモンアゲハの進出によって短期間に引き起こされたという説は、当時は信じ難かったものではないだろうか。また私自身、ジョウカイボンとハネビロハナカミキリ、ツマグロハナカミキリ2種との関係はじめ、ジョウカイボン科とハナカミキリ類との形態の類似性は、先生に指摘されてはつきりと意識するようになった。私が昆虫の擬態関係にひときわ関心があるのも、先生の影響が強いと思われる。

このように黒沢先生は、タマムシ科の分類学的研究の第一人者であると同時に、昆虫のさまざまな現象面に先駆的かつ独創的な仮説を提唱されてきた。まさに博物学者という名にふさわしい。しかし、その双方を満足させるような業績を挙げることは、非常に難しいことと身をもって感じている。それを成し遂げた先生には、ただただ敬服するしかない。

黒沢先生をこうして回想してみると、私自身がこれまで興味をもって行ってきたことは実績とスケールこそ遠く及ばないにせよ、先生とよく似ていることに気づく。やはり私は、黒沢先生によって育てられたのかと、つくづく感じ入ってしまう。

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

アオ研の頃

新里達也

かれこれ7~8年前に遡るが、当時新宿落合にあった私のオフィスで、毎月第4月曜日の午後、アオカミキリ研究会というサロンが開かれていた。通称アオ研と呼ばれていたこのサロンは、まったくの私的な集まりで、黒澤良彦先生を囲む形で、高桑正敏さん、大谷卓也さん、それに私の4人だけでこっそり行われていた。したがって、部外でその存在を知る人は、たぶん片手くらゐのものだったし、周知させメンバーをあえて募ることもしなかった。なぜ、月曜日という平日で、さらに昼日中に開いていたかといえば、それは高桑さんの勤務する博物館の公休にあたり、大谷さんが土日は競馬で忙しいからムリという、あまりよくわからない理由からであった。もっとも、黒澤先生はすでにリタイヤの身で毎日が日曜日であったし、私の方も今ほどには仕事が忙しくはなかった。

そもそもこの集まりは、大型美麗昆虫が大好きな黒澤先生が、アオカミキリに造詣が深いことを受け、新らしもの好きの高桑さんが音頭を取り、始め

られたのであった。そして、大谷さんの生業は標本屋で、そのルートを使って集められたアオカミキリのコレクションは結構なレベルとボリュームを誇り、この豊かな材料を使って何かできないものかと、皆で考えたのである。実のところ私は、大型昆虫はむしろ苦手であって、アオカミキリに関して、そのときまでまともな知識を持ち合わせておらず、むしろこの機会に少しは勉強するかと考えていた程度の消極メンバーであった。

その当時の黒澤先生は、まだかくしゃくとされていた頃であり、アオ研が始まる時刻のだいぶ前からお見えなることが常で、私の仕事を何かと邪魔してくるのだが、月例となっていた。またあるときは、*Polyzonus* と *Anubis* という熱帯アジアに分布する青縞模様のアオカミキリ一群をインロー箱いっぱい詰めて持って来られ、先生がわかる範囲で調べられたその先を私にやれとあって、半ば強引に押しつけ、帰っていかれた。

それでも、メンバーは誰ひとり欠席することなく、当番制で話題を持ち寄りながら、それをもとに熱心に議論や楽しい推論を重ねたような気がする。

アオカミキリ分類の現状をあまりご存知のない方は意外に思われるかもしれないが、この仲間は体長

が30~40 mmを超えるような大型のものでも未記載種が多く、属以上の高次分類はひどく混乱している。手をつけようとすると、これはこれでかなり本腰で取り組まなければならない代物なのである。

しかしアオ研はあまり深く考えない集まりであったので、そのような泥沼を無謀にも黙殺しながら、約1年ほどの期間会合を続け、そしてある日、忽然と自然解散してしまった。

解散の理由はいろいろあったのだが、皆の熱意がそこまであったのだろう。ただ、黒澤先生だけは、この月曜日を楽しみにされていただけに、何とも申し訳ないような気持ちが残った。メンバーにとって、アオ研の目的のひとつは、口にこそ出してはいなかったけれども、やや引き籠もりがちになりつつあった先生を呼び出す口実づくりでもあったからである。先生を励ますための会は、先生を少し失望させて休会ということになった。

その後、大谷さんが競馬でこっぴどくやられたことが主な原因で彼のコレクションが売りに出され、それを私が引き取ることになり、またこの弾みで標本収集を精力的に行ったため、私は今かなりのアオカミキリお大臣ということになっている。アオ研は、標本の集積という、少し生臭い遺産をもたらしてくれたことだけは確かであった。ただ、研究の方はいまひとつ進んでおらず、高桑さんと私はアオカミキリの論文をほとんど書いていない。だいぶ前になるが、黒澤先生が「大型種は老眼で目が利かなくなってきたらやればよい」というようなことをいわれていたことがある。であれば、私たちは先生の教え

を、今のところ忠実に守っていることになる。

黒澤先生が亡くなって四十五日が過ぎようというある日曜日のことである。その日はよく晴れわたり、庭の山桜が今まさに満作の花を湛えていた。

私は書斎の窓を開け放ち、久しぶりに標本箱の葉替えを行っていたのだが、棚積みめの箱を整理するうちに、いつのまにか見覚えのある年代物のインロー箱を手にしてしまった。それはアオ研の頃に黒澤先生が私に託された青縞模様のアオカミキリの箱で、もうだいぶ前から棚の隅で忘れ去られていたものである。

私は、懐かしさと虫害の不安が入り混じった複雑な気持ちで、そっと埃のかぶったその蓋を開けてみた。朝の淡い日差しのもと、防虫用のナフタリンの蒸せかえる匂いとともに、整然と並べられた金緑の一群の標本は、幸いなことに、昔と変わらずキラキラとまばゆく輝いていた。

「標本が基本だよ」往年の研究室で、アオカミキリに針を打ちながら、先生はよくそのようなことをおっしゃっていた。いま私が抱えた箱のなかで、脚をやや浮かせたような独特の展脚の癖、小さいけれどやや太い活字ラベルは、まさに黒澤流以外の何物でもない。先生とはひとまず幽明境を異にするが、あの頑固な職人気質と子供のようなアマチュアリズムは私の腕のなかに今も息づいているのである。標本を眺めるているうちに、ふいにあの頃の怖いけれど無邪気な先生の実顔が思い出された。

(東京都国分寺市)

黒澤良彦博士を偲んで

多摩 夢子 (佐々治寛之)

長崎の一高校生だった私は広範に虫が好きだったが、取り分け甲虫が好きだった。そしてそれまで極珍種とされていたモンキタマムシの多産地を発見することがきっかけでタマムシに取り憑かれる。タマムシ科を専門にやろうと、国立科学博物館の黒澤良彦先生の指導を仰ぐことになる。といっても長崎の高校生が東京まで出かけて教を乞う訳には行かない。文通によるものだった。その成果は高校3年の2月、長崎県科学教育展で「長崎県のタマムシ科」のレポートは教育長賞を受けた(1954)。

やがて私は九州大学に昆虫分類学をやろうと入学した。教養部の、指導教官の白水 隆先生に将来の進路について相談した。農学部の安松京三先生にも相談した。出来れば高校からの延長でタマムシ科の分類をやりたかった。「日本のタマムシ科は黒澤さんの独壇場で今から君がやる隙間はあまりない」との意見。天敵学者でもある安松先生の奨めもあってテントウムシ科を中心にやることになった。

それでもタマムシへの執着は容易にうすれない。その具体的な現われは、「九州産タマムシ科雑報(1)

Trachys 属」(筑紫の昆虫, 1955)に見られる。専門的な研究はすでにヒラタムシ上科に移行していたが、タマムシはやはり関心事であった。

私が黒澤博士と直接知り合った時、先生はすでに科博においでであったが、しばらく九大においでになったことから、同門の兄貴分としての親しみがあがり、上京する度ごとに博士を訪れ、時には昼食をご馳走になり、タマムシ談義を重ねた。

その後もずっとタマムシに関心をもち、「多摩夢子」なる雅号で雑文を書いたりもしたが、研究対象というよりも趣味の虫といった方が良からう。先生もそれを良くご存知で、新しい情報があればその都度見せて下さった。

黒澤先生は私にとって、出発点はタマムシを通じての恩師であるが、私自身が広範な甲虫分類群を手がけるようになったこととも関連して、分類学、なかでも生物地理学的分野、昆虫の分布論について多くの御指導をいただいた。

いま手元に「テントウムシの自然史」なる小さい本がある。もし、50年ほど以前黒澤博士がタマムシをやっていないければ、テントウムシの代わりに「タマムシの自然史」を私は書いていたかもしれない。などと余計なことを考えて黒澤博士を偲んでいる次第である。

(福井県坂井郡)

黒澤さんの逝去を悼む

佐藤正孝

人間、いつかはこの世を去らねばと判っているが、近年、私自身の年のせいもあってか恩師としてきた方々の訃報に接することが重なり寂しい思いをすることが多くなってきた。そこへ黒澤さんが亡くなられたとの報に、体調が芳しくないことを耳にしていただけにやはり来るべきものが来てしまったと、寂しさと惜念の思いで一杯である。

数10年に渡る長い親交であったことが、走馬灯のように駆け巡る。色々とお教えていただいたこと、若き日にフィリピンの山中でクマバチの巣穴から出てくるヒラズゲンセイや海岸でハンミョウを競い合せて採集したこと、博物館を訪れる度に夕食に必ずトンカツをご馳走になったことなどなど、思いは尽きない。

タマムシをはじめ美しい虫の好きな黒澤さん、それを生物地理学的な手法で解析された思考、まだまだ残された問題が山積で研究をつづけられたいご意向をよくうかがったものである。「君、このことをどう思うかね」とよく意見を聞かれたものである。しかし、それも叶わなくなってしまったことは、惜しみても惜しみ足りない。

酒の飲めない黒澤さんとは、あるいは飲めない私



1977年フィリピン、バギオのバインホテルの前。

に付き合ってくださいだったのか、紅茶で議論した思いが深い。そして、「私の退職後は君がきてくれよ」とよく言われ、「はい」と答えていたものの、実際の機会があった時に、私の家庭の事情でお断りせざるを得なかったことは思い出しても申し訳ないことをしたものであった。かといって、黒澤さんの学識を継げるだけの力も無い私、その一部でもと努力している現状でご勘弁ください。今後とも天界から見守ってくださいと勝手なお願いをし、どうか安らかに極楽で美しい虫たちと雑事にとらわれることなく楽しく戯れてくださいと筆を置きたい。

(名古屋女子大学)

偉大なる虫好き

酒井 香

黒澤良彦先生は、タマムシの世界的権威であり、ひろく昆虫全般に深い知識と見識を有する学者であったが、それ以前に、いつまでも昆虫そのものに対する情熱を失わない「偉大なる虫好き」であったと思う。そう考えることは先生の学識や業績をなんら軽んじることにはならないし、また、アマチュアのおよき理解者であり相談相手であり続けたのは、それが一番の理由だったのではないだろうか。

黒澤先生とお付き合いさせていただくようになったのは、科学博物館の動物研究部長を退官される少し前の頃で、某標本商でハナムグリを漁っていると先生がお見えになり、言葉をかけてくださったのがきっかけである。その当時、先生はハナムグリに関する論文を何編か書いておられ、タマムシとともにこの分野でもわが国の第一人者であったので、それからいろいろと教を請うようになった。こちらが科学博物館にうかがったり、先生がわざわざ拙宅に足を運んでくださったりもしたが、もっとも頻繁にお会いしたのは標本商と年に何回か開催される「インセクトフェア」(昆虫展示即売会)の会場であった。お元気であった頃は「インセクトフェア」はほぼ毎回顔を出され、標本商にもしばしば訪れて、ア

ジア産を中心とした世界各地の標本をチェックされていた。実に熱心にして時間をかけてご覧になるのが常で、学識や実績は当然として、「虫好き度」でもとてもかなわないと思ったものである。とにかく標本収集にかける意気込みと熱意は突出しており、また、そういう方だからこそ多くの人が協力を惜しまなかったようである。科学博物館の膨大なコレクションも、黒澤先生の存在なしに語るができないことは、誰しもが認めるところであろう。

標本にまつわる思い出はいくつもあるが、タイの採集ツアーにご一緒したときの印象はとりわけ忘れがたい。その旅行は採集の方ではほとんど成果がなく、標本購入が主となったのだが、チェンマイのホテルで現地の標本商が持ち込んだ甲虫を眺めていると、突然「しめた！」という黒澤先生の大声。何事が起こったかと驚いたが、なんでもタマムシの属を考えるとき非常に重要な種があったというのである。その嬉しそうな表情は、初めてカプトムシを採った昆虫少年のそれとんなら変わるところがなかった。また、ひそかに集めていた東南アジアのオオキノコムシ属 *Encaustes* をお見せしたときには、あまりにも熱心にご覧になるので、「必要なものがあつたら差し上げます」と申し上げたところ、その20分後に我がオオキノココレクションは壊滅的な状態になっていた。それでいてしくじったという気にはならず、むしろ喜んでもらえて嬉しいと思わせ

るところが先生の人徳であろう。ある年の初めには「腰を打って自由に出歩けなくなったので、面白そうなタマムシがあったら手に入れておいて欲しい」と依頼があり、よくわからないものの適当に見繕って何度かお送りしたこともある。後日「興味深いものがたくさんあり大喜びしております」とお手紙をいただき、実際にそのなかのいくつかは、しばらくして *Elytra* に新種、新亜種として記載された。

一方、こちらもしばしば貴重なハナムグリ（やタマムシ！）を頂戴し、また、益本仁雄さんと台湾のハナムグリを調べたときには、科学博物館のコレクション使用の便宜を含めて、全面的なご支援を賜

た。ひろい人脈を駆使し、ときには自ら経済的負担をしてまで標本を集められたのは、ご自分の研究用ばかりではなく、昆虫を調べようとする多くの研究者のためでもあったことを忘れてはなるまい。

わずか20年たらずのお付き合いであったが、その間に教えていただいたことは数え上げればきりが無い。つまるところそれは“昆虫の面白さ”そのものであったような気がする。黒澤先生は亡くなったが、その教えを守り、これからも大いに虫を楽しんでいきたいと思う。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

(東京都大田区)

黒澤先生の思い出

川田 一之

映画界に世界の黒澤がいたように、昆虫界にも世界の黒澤がいた。ともに後世に残る業績を残した。一種近寄りたがたい雰囲気と言うか威厳を備えた人で、亡くなる直前まで自分の愛した仕事に取り組んでいたことまでよく似ている。

と書いてみたがやはり私にとって黒澤良彦博士は、プロ野球の王、長嶋のようにあこがれの人であり、やはり先年亡くなられた中根猛彦博士とともにもっと元気で長生きをして頂きたかった。

私は黒澤先生とは中根先生ほど親しくお付き合い頂いた方ではないが、サインボールならぬ別刷を頂いたり、鞘翅学会や科学博物館で気楽にお話させて頂く機会に恵まれたのは大変幸せだった。最近になって世界のクワガタムシの名前もかなり容易に調べら

れるようになったが、20数年前は先生が第一人者で、あるとき私は先生に「先生東南アジアのクワガタをみんな書いてくださいよ」と言ったら先生は真顔で「じゃあ君が雄、雌そろいで採ってきてよ」と言われてすぐにニコッとされた事がつい先日のように思える。

近年はパーキンソン病を患われていながら鞘翅学会やインセクトフェアにしばしば足を運ばれわずかな段差でさえ苦にされている（肩をお貸したこともあった）にもかかわらず、虫に対する旺盛な意欲を見せられていたことは我々も見習わねばならないと思う。

二人の偉大な先生があい前後して逝去されひとつの時代が終わったと感じた方も多いはずである。

先生のご冥福をお祈りするとともに、幽冥の境を越えられたが天上からお元気なころの威厳のあるこわい声で我々を叱咤していただきたいものである。

(神奈川県川崎市)

黒澤先生に頂いた別刷

妹尾俊男

黒澤先生と初めてお話したのは、1976年、私が東京農大の昆虫学研究室に入り、ヒゲナガゾウムシを蒐めだした頃であった。甲虫談話会の採集会で、蔵王のもしか温泉へ向いながら採集している時、「何を採集しているのかね」と、あの大図鑑の黒澤良彦先生にお声をかけて頂き、たいへん感激したのを覚えている。ご指導ご鞭撻を願ひし、いくらかの胸の赤い小さなノミヒゲナガゾウムシが入った殺虫管をさしだしたところ、たいへん興味深くご覧になった。

それ以来、上野の博物館で開かれていた甲虫談話会の例会の後、各テーブルから灰皿を回収し、地階にあった普及課へ黒澤先生と一緒に持っていき、簡単に洗って返すのが慣例になったが、それがとても嬉しかった。

のちに黒澤先生のところで特別研究生として2年間置いて頂き、東洋のヒゲナガゾウムシと生物地

理に関する研究をおこなう機会に恵まれた。標本室の一郭に机と先生ご愛用のライトの顕微鏡を貸して頂いた。そして、「妹尾君（いつも尻上がりの口調で呼ばれていた）、もし欲しい別刷があれば、そのロッカーの中にあるから持っていきなさい」「全部いいですか」「あーいいよ」それで1部ずつ丁寧に抜き



筑波の林業試験場の植原さんのところに行った時の写真（1987年12月）



「甲虫ニュース100号発行記念の夕べ」でスピーチをされている黒澤先生(1992年12月)

出し、ずっしりと重みを感じながら持ち帰った。その日は朝まで読みふけた。『タムシ科の分布から見た小笠原諸島の昆虫相の起源』『日本産潜葉性タムシ類3種の分布に及ぼした黒潮の影響』『伊豆諸島特産種ミクラヤマクワガタの系統と分布』『東亜産ウバタムシ属の分布地理学的知見による再検討』などは当時の私にはとても新鮮で、何度も

何度も読み返した。今でも心に深く残っている。他にも『対馬のクワガタムシ』『日本産エゾゼミ属の分布地理』『春の蝶』『中国の蝶』『高山の蝶たち』などの興味深い論文がたくさんあり、これらが私の生物地理の原点になっている。また読み物としては『わが10代を語る』が先生のお若い頃の写真付きで、昆虫を蒐集されるようになったきっかけなどが語られている。

お昼はいつも近く中華料理店で五日そばを食べられ、3時のお茶菓子が無い時にはその帰りに私の好みにあわせて買って下さった。また、「きのう標本商に行ったついでに」と大型で見栄えのするヒゲナガゾウムシを買ってきて下さったことも度々あった。1984年の科博の研究報告には、ヤンバルテナゴコガネの記載のすぐ後にヒゲナガゾウムシの2新種の記載を載せて頂いた。「ヤンバルテナゴの記載をコピーすると、僕の1頁目が必ず付いてきますね」と言ったらお笑いになっていた。

黒澤先生に分布地理と人の強さと優しさを教えて頂いた。心よりお礼を申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

(中央大学附属高校)

クロサワミヤマクワガタ台湾省新竹県の記録

境野 広行

クロサワミヤマクワガタ *Lucanus kurosawai* SAKAINO は台湾の台中県及び南投県の数カ所の山地より得られた標本をもとに記載された、小～中型のミヤマクワガタ属の1種である。記載以来5年以上が経過するが、稀な種のようにその間の追加記録も見られず、同属の他種、とりわけ外見的にもよく似ているクリイロミヤマクワガタ *L. kanoi* Y. KUROSAWA との分布的な関係なども、何ら特筆すべき知見が加わることもなく現在に至っている。

今回筆者は、記載以後に見ることができた標本の中に、従来知られていなかった産地のものを認めたので記録しておくたい。

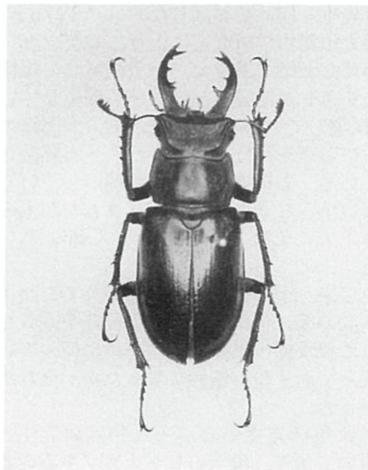
1♂、台湾省新竹県五峰郷大鹿林道(靛霧付近、標高約2,000m)、1. VI. 1995.

筆者の手許にあるのは上記の1♂だが、同時に数頭が採集されているので、本種の生息環境としては安定した地域と言えるようで、分布域も僅かながら北に拡大したことになる。また、同地は今まで、昆虫類の調査採集がどちらかと言えば手薄な地域で、今後、調査が進むことを期待したいが、一方では雪霸国家公園(国立公園)の指定地域と隣接しているので、採集活動には注意を要する。

さて、本種の種名は言うまでもなく故黒澤良彦博士に献名されたもので、筆者としても特別な思い入れがあって記載した種である。黒澤博士は周知のようにクワガタムシ類も大変お好きだった方で、特にミヤマクワガタ類には世界的な視野で並々ならぬ興味と情熱を持っておられた。筆者も学生の頃より、

黒澤博士にはいろいろとご指導頂き、随分とお世話になった一人として、何かの形で恩返しをしたいと、ずっと以前から考えていた経緯があったからである。

kurosawai の種名を持つ甲虫は数多く、既にクワガタムシ科にも存在していたが、当時本命とも言えるミヤマクワガタ属にはまだ無かったので、博士ご自身が命名された *kanoi* や *miwai* などのかつての台湾昆虫界の大御所とともに、是非とも名を連ねて頂きたいと考え、おこがましいながらその機会を窺っていた。その間、数種の新種の発見があったものの、筆者の抱いていた思いとは裏腹な結果が続き、切歯扼腕し焦燥する日々を過ごしたが、本種によってようやく積年の宿題を果たしたような気持ち



で、ほっとしたものである。

生前の博士と、本種の分類学的な見地で意見を交換したりすることはほとんど無かったが、やはりミヤマクワガタ属に *kurosawai* が加わったことを大変喜ばれていたと後に伝え聞き、今となってはお元気な間に実現できて本当に良かったと思っている。

なお、本種の和名については、記載時に筆者が提唱したものがあるが、既に一部では表題のように呼ばれており、故人を永遠に讃える意味ではこれにす

ぐる名は無いとの思いもあり、いまさらではあるが本稿で改称したい。

最後になりましたが、黒澤博士のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

参考文献

境野広行, 1995. 台湾産ミヤマクワガタ属の1新種. 月刊むし, (292): 4-7, pl. 2.

(鎌倉女学院)

琉球列島の甲虫相とその保全, II¹⁾

佐藤 正孝

3. 甲虫類で保全を要する環境要素とそこに生息する種

琉球列島における甲虫相は、島嶼そのものが南北に長く点在すること、甲虫類の種類が多いことなどの反映から、その内容が多様を極めていることは当然といえる。そこで、甲虫類の保全に対する問題としては、環境圧に対する現在の状況から、琉球列島で各種の開発に直面し生息環境が著しく悪化している環境要素をあげ



図 22. 伊良部島の海岸.
 図 23. 座間味島の海岸.
 図 24. 沖縄本島備瀬崎のサンゴ礁.
 図 25. 沖縄本島大浦川の河口付近.

¹⁾ SATO, Masataka: The Coleopteran Fauna of the Ryukyu Archipelago and its Conservation, II.

て、そこで激減している種の中から固有種を主体としてまとめてみた。なお、個々の種については、一連の報告である朝比奈(1989a, 1989b, 1990)の中に解説があるので参照されるとよい。いずれそれらも総合的にまとめてみたい。

1) 海岸線の各種汚染によって、サンゴ礁を含む岩礁地帯に生息する種は大きな打撃を受けている。水溜りに生息するゲンゴロウを除いては、満干線に生息している種であるが、これらの生態についてはほとんど判っていない現状である。

ウミホソチビゴミムシ

Perileptus morimotoi S. UÉNO

アサヒナホソチビゴミムシ

Perileptus asahinai S. UÉNO

ミナキバナガミズギワゴミムシ

Armatocillenus seticornis (LINDROTH)

キイロキバナガミズギワゴミムシ

Armatocillenus kasaharai (HABU)

クロキバナガミズギワゴミムシ

Armatocillenus tokunoshimanus NAKANE

ツツイキバナガミズギワゴミムシ

Armatocillenus tsutsuii S. UÉNO

ホソウミハネカクシ

Bryothinusa minuta (SAWADA)

ナカネウミハネカクシ

Bryothinusa nakanei (SAWADA)

キイロウミハネカクシ

Bryothinusa tsutsuii (SAWADA)

エサキサソウミハネカクシ

Brachypronomaea esakii SAWADA

トカラインゾウウカイモドキ

Laius miyamotoi NAKANE

チャイロチビゲンゴロウ

Liodessus megacephalus (GSCHWENDTNER)

上記の種の主な生息地を挙げると、次のような島や地名となる。

中の島船倉、宝島、奄美大島住用川河口、沖縄本島奥、大浦川河口、石垣島名蔵川河口、西表島浦内川河口、後良川河口。

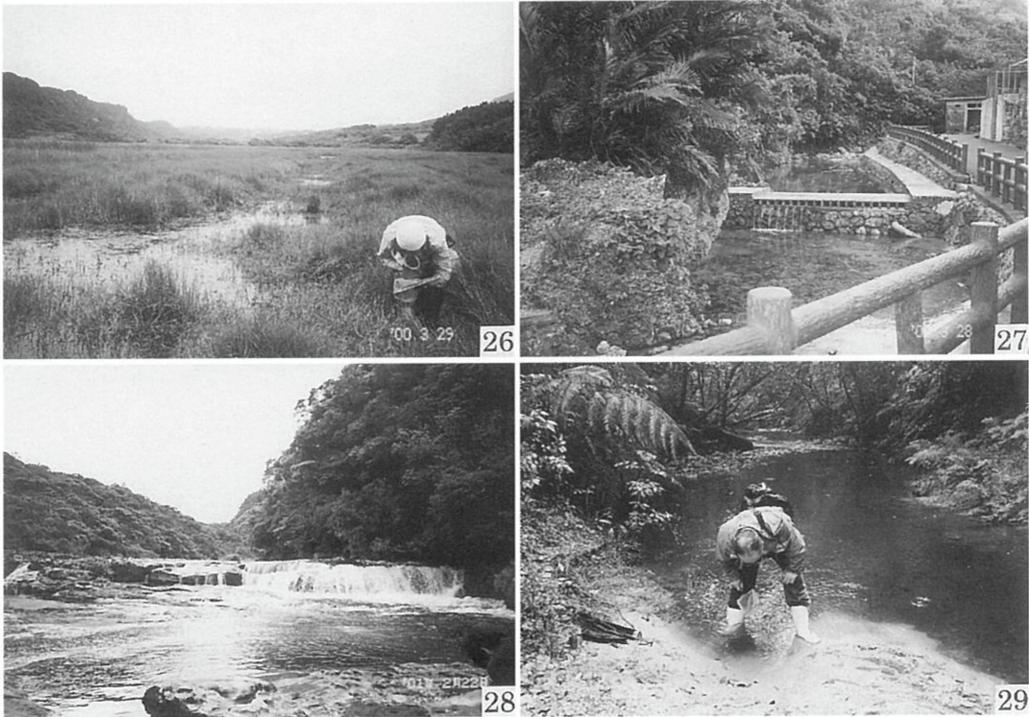


図 26. 与那国島樽舞湿原。
 図 27. 与那国島田原水源で改変された流水域の現状。
 図 28. 西表島カンビラーの滝。
 図 29. 石垣島白水溪。

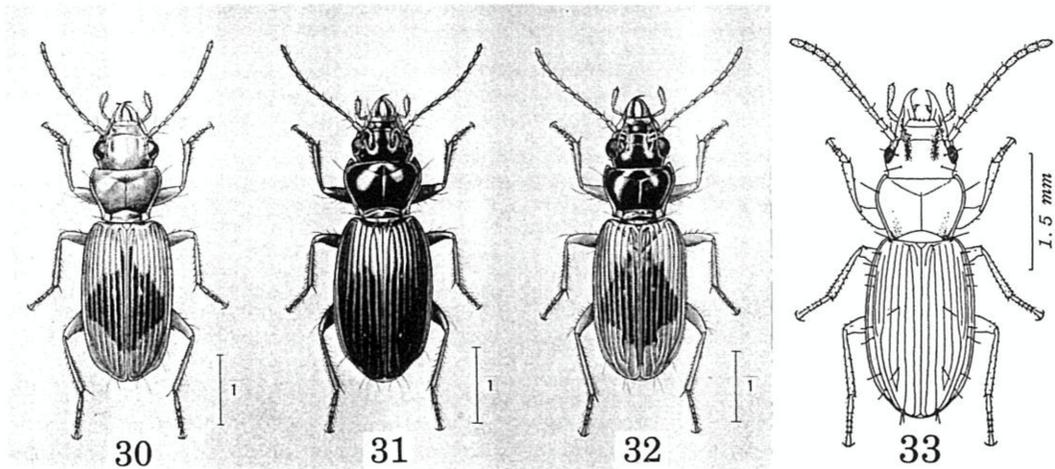


図 30. キイロキバナガミズギワゴミムシ *Armatocillenus kasaharai* (HABU). (笠原, 1980)
 図 31. クロキバナガミズギワゴミムシ *Armatocillenus tokunoshimanus* NAKANE. (笠原, 1980)
 図 32. ミナキバナガミズギワゴミムシ *Armatocillenus seticorne* (LINDROTH). (笠原, 1980)
 図 33. ツツイバナガミズギワゴミムシ *Armatocillenus tsutsuii* S. UÉNO. (UÉNO, 1955)

2) 砂浜は、海水浴などの観光地化や護岸堤防の建築によって環境変化が進み、甲虫類の生息環境が奪われている著しい現状がある。

シロヘリハンシヨウ

Civindela yuasai okinawense (HORI et CASSOLA)

ヤエヤマケシガムシ

Cercyon yayeyama CHÛJÛ et M. SATÛ

ルリキオビジョウカイモドキ

Intibia takaraensis (NAKANE)

スジケシマグソコガネ

Odochilus convexus NOMURA

サキシマケシマグソコガネ

Psammodius kondoi MASUMOTO

ヤエヤマオオスナゴミムシシムシダマシ

Gonocephalum kondoi MASUMOTO

上記の種の主な生息地を挙げると、次のような島や地名となる。

宝島, 奄美大島アヤマル岬, 笠利岬, 徳之島花徳, 沖縄本島辺戸岬, 宜野座, 石垣島名蔵, 川平, 西表島白浜, 千立, 大富, 古見, 与那国島祖納, 比川。

3) 山地帯におけるダムの構築や河川改修などの開発工事によって、溪流のような良好な流域環境が多く失われ、そこに生息する種にとっては大きな打撃となっている。多くは水中に生息する種であるが、ゴミムシ類のように水辺の石下に生息する種もある。

アマミナガゴミムシ

Pterostichus plesimorphus NEMOTO

スジダカヤセヒラタゴミムシ

Ichnagonum carinigerum KASAHARA et M. SATÛ

イリオモテミズギワゴミムシ

Bembidion satoi MORITA

ヤエヤマコオナガミズマシ

Orectochilus yayeyamanus M. SATÛ

オキナワオオミズマシ

Dineutus mellyi RÉGIMBART

ウエノチビケンゲンゴロウ

Microdytes uenoi M. SATÛ

フタキボシケンゲンゴロウ

Allopachria bimaculata (M. SATÛ)

オキナワマルチビガムシ

Pelthydrus okinawaensis NAKANE

アマミマルヒラタドロムシ

Eubrianax nobuoi M. SATÛ

イハマルヒラタドロムシ

Eubrianax ihai CHÛJÛ et M. SATÛ

ノムラドロムシ

Nomuraelmis amamiensis M. SATÛ

ウエノツヤドロムシ

Urumaelmis uenoi (NOMURA)

上記の種の主な生息地を挙げると、次のような島や地名となる。

奄美大島役勝川, 住用川, 河内川, 湯湾岳, 徳之島三京, 沖縄本島羽地大川, 源河大川, 辺野喜川, 漢那福地川, 大浦川, 与那川, 石垣島名蔵川, 西表島白浜, 浦内川, 仲間川, 仲良川, 与那国島田原川。

4) 湿性環境は、琉球石灰岩に代表されるような基盤となる地質の関係もあり、湿地が形成されにくい状況である。少ない上に、海岸地域に存在した湿原は人間生活との関係でもうほとんど無くなってしまっている現状である。

ミズモグリゴミムシ
 フタホシクロクビナガゴミムシ
 イシイクビナガゴミムシ
 オオイチモンジシマゲンゴロウ
 フチトリゲンゴロウ
 ヒメフチトリゲンゴロウ
 リュウキュウヒメミズスマシ

上記の種の主な生息地を挙げると、かなり限られるが、次のような島や地名となる。
 中之島大池、沖縄本島山原、池間島、与那国島樽舞湿原。

5) 良好な森林は多様な環境として、草木、樹木、花、倒木など植物をめぐる種、林床に生息する種など多くの群に含まれる種が見られる。しかし、これらの森林は開発の波にかなり危険な状況にあるといえる。

ヤエヤマクビナガハンミョウ
 オオヒゲトハナムグリ
 ヤンバルテナガコガネ
 チャイロホソコガネ
 スジホソコガネ
 チャイロマルバネクワガタ
 アマミマルバネクワガタ
 オキナワマルバネクワガタ
 ヤエヤママルバネクワガタ
 アマシカクワガタ
 スジプトヒラタクワガタ
 ヨツモンオオアオコメツキ
 ノブオオアオコメツキ
 タテオビフサヒゲボタル
 キベリフサヒゲボタル
 ミヤコマドボタル

Hololeius ceylanicus (NIETNER)
Mimocolliuris insulana HABU
Ophionea ishiii HABU
Hydaticus pacificus AUBÉ
Cybister limbatus (FABRICIUS)
Cybister ventralis SHARP
Gyrinus ryukyuensis M. SATO

Collyris loochoensis KANO
Anthypna splendens (YAWATA)
Cheirotonus jambar Y. KUROSAWA
Callinomea ishikawai Y. KUROSAWA
Coenochilus striatus Y. KUROSAWA
Neolucanus insularis MIWA
Neolucanus protogenetivus Y. KUROSAWA
Neolucanus okinawanus SAKAINO
Neolucanus insulicola Y. KUROSAWA
Raetulus reticornis Y. KUROSAWA
Serrogunathus costatus (BOILEAU)
Campsosternus matsumurae MIWA
Campsosternus nobuoi ÔHIRA
Stenocladus azumai NAKANE
Stenocladus shirakii NAKANE
Pylochoelia miyako NAKANE

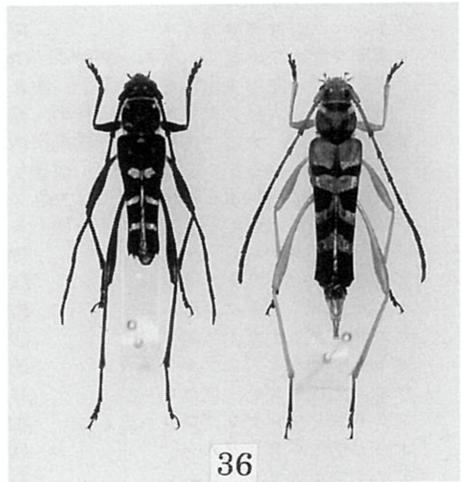
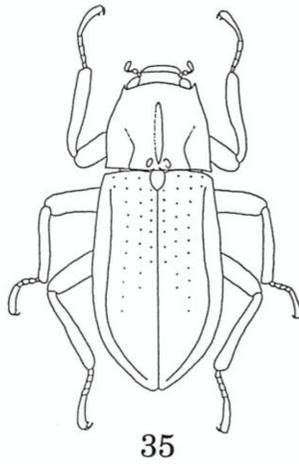
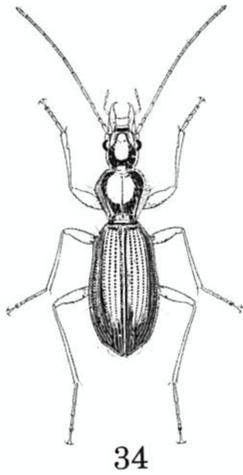


図34. スジダカヤセヒラタゴミムシ *Ischnagonum carinigerum* KASAHARA et M. SATO.
 図35. ウエノツヤドロムシ *Urumaelmis uenoi* (NOMURA).
 図36. ヨツオビハレギカミキリ *Acrocyrtidus elegantulus* (MATSUSHITA). (左: ♂, 右: ♀)

朽木や倒木

ヤエヤマセズジムシ
 ジュジエグリゴミムシ
 オバケハネカクシダマシ
 トカラマンマルコガネ

Omoglymmius microtis R. T. et J. R. BELL
Eustra crucifera S. UÉNO
Uruminopeprus sakaii M. SATO et HATTA
Madrasostes kazumai OCHI, JHOKI et NAKANE

イリオモテマンマルコガネ
アマミニセクワガタカミキリ
フェリエベニボシカミキリ
ヨツオビハレギカミキリ
ヨツモンミツギゾウムシ
ヤエヤマミツギリゾウムシ

Madrasostes hisamatsui OCHI
Parandra shibatai HAYASHI
Rosalia ferriei VUILLET
Acrocyrtidus elegantulus (MATSUSHITA)
Baryrhynchus tokarensis OHBAYASHI et M. SATO
Baryrhynchus yaeyamensis MORIMOTO

花

オオシマホソハナカミキリ
オキナワチャボハナカミキリ
ヤエヤマクロスジホソハナカミキリ
アマミアオジョウウカイ
オキナワアオジョウウカイ
アマミチビジョウウカイ

Strangalia gracilis GRESSITT
Pseudallosterna aritai OHBAYASHI et N. OHBAYASHI
Strangaliella ishigakiensis (HAYASHI)
Themus kazuo N. OHBAYASHI et M. SATO
Themus kurosawai M. SATO
Malthinellus chujoi (WITTMER)

林床

ヒョウタンキマワリ
オキナワケバゴムムシ
アマミスジアオゴムムシ

Eucrossoscelis broscosomoides NAKANE
Trichisia insularis (SCHÖNFELDT)
Haplochlaenius insularis S. UÉNO

上記の種の主な生息地を挙げると、次のような島や地名となる。

中之島, 悪石島, 奄美大島長雲峠, 金作原, 湯湾岳, 沖縄本島西銘岳, 与那覇岳, 宮古島, 石垣島於茂登岳, 西表島, 与那国島宇良部岳, 久部良岳。

- 6) 森林に生息する動物の糞や死骸などの有機物あるいは倒木に生育する菌類などに生活を依存している種は、開発に伴う動物や倒木の減少と共に少なくなっている。

ネパールモンシデムシ
ウエノコブスジコガネ
マルダイコクコガネ
イシガキトビイロセンチコガネ
アマミトビイロセンチコガネ
ヤンバルエンマコガネ
ムラサキエンマコガネ
オキナワエンマコガネ
アカダルマコガネ

Nicrophorus nepalensis HOPE
Trox uenoi NOMURA
Copris brachypterus NOMURA
Bolbelasmus ishigakiensis MASUMOTO
Bolbelasmus shibatai MASUMOTO
Onthophagus suginoi OCHI
Onthophagus murasakianus NOMURA
Onthophagus itoi NOMURA
Panelus rufulus NOMURA

上記の種の主な生息地は、森林であることから前記5)と同じと考えて差しつかえない。

琉球列島における甲虫類の特産種を主体に、どのような環境圧がかかっているかを概観してみた。いろいろ問題はあがるが、森林の破壊、海岸線の汚濁・変遷などが小さな島の生態系にとっては与える影響は大きな問題となっていることが浮き彫りにできるようなのである。これらに対する環境圧を、貴重種の生息域と対応させつつ保全すべきところは保全するという対策を、今すぐに必要としている現状と言えよう。なお、主な生息地としてあげた島や地名は、筆者のこれまでの経験に基づくものが多く、日時の経過に伴って現状と異なっている場合もあることを了承願いたい。

謝 辞

この報告をまとめるに当たっては、多くの方々に大変お世話になった。ここには特に私の古くからの悪友たち、有田豊、大林延夫、木村正明の諸氏と朝比奈正二郎博士、上野俊一博士、高橋敬一博士のお名前に留めるが、いろいろとご支援下さった他の多くの方々と共に感謝申し上げる。図の引用を快諾くださった上野俊一博士、奥島雄一、笠原須磨生両氏およびカミキリムシの写真を提供くださった大林延夫博士に厚くお礼申し上げる。

この研究調査を行うにあたっては、一部に環境庁野生生物の希少種調査関係、河川環境管理財団河川整備基金助成事業、名古屋女子大学特別研究などによる助成を受けた。

主要参考文献

- 東 清二, 1980. さまざまな昆虫. 木崎甲子郎編, 琉球の自然史, pp. 101-112. 築地書館, 東京.
朝比奈正二郎, 1989a. 沖縄島北部の昆虫相. 昭和62年度沖縄島北部地域調査報告書(環境庁): 283-402.
朝比奈正二郎, 1989b. 奄美大島の昆虫相. 昭和63年度奄美大島地域調査報告書(環境庁): 183-221.
朝比奈正二郎, 1990. 西表島の昆虫相. 昭和63年度西表島崎山半島地域調査報告書(環境庁): 173-237.
朝比奈正二郎ほか, 1991. 平成2年度南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究報告書(環境庁), 昆虫類: 257-338.

- CARLQUIST, S., 1974. *Island Biology*. ix+660 pp. Columbia Univ. Press, New York.
- 中條道夫, 1973. 琉球列島(薩南群島も含む)産コメツキムシ科の分類・分布学的研究. 香川大学教育学部研究報告, II, (218): 17-41.
- HAYASHI, M., 1960. An analysis of the Japanese cerambycid fauna with special reference to distribution belt. *Pacif. Ins.*, 2: 123-131.
- KIMOTO, S., 1967. Some quantitative analysis on the chrysomelid fauna of the Ryukyu Archipelago. *Esakia, Fukuoka*, (6): 27-54.
- KIMOTO, S., 1974. On some infraspecific variation of chrysomelid beetles (Coleoptera) occurring in the Ryukyu Archipelago. *Kontyû, Tokyo*, 42: 270-282.
- 木元新作, 1979. 南の島の生き物たち. i+vii+203+vi pp., 4 pls., 共立出版, 東京.
- 木元新作, 1986. ハムシ, 離島におけるハムシ相の形成. 桐谷圭治編, 日本の昆虫, pp. 122-131. 東海大学出版会, 東京.
- 金城政勝, 1986. 南西諸島の昆虫相. 木元新作編, 日本の昆虫地理学, pp. 85-91. 東海大学出版会, 東京.
- 木崎甲子郎・大城逸朗, 1997. 琉球列島の古地理. 海洋科学, 9: 542-549.
- 木崎甲子郎, 1980. 琉球の自然史. 4 pls.+ 282pp. 築地書館, 東京.
- 小島圭三ほか, 1965. 琉球諸島のカミキリムシ. 高知大学学術研究報告, 14, 自然科学, II, (9): 71-104, 1 pl.
- 榎原 寛, 1988. 南西諸島のカミキリムシ. 日本鞘翅学会特別報告, (3): 58-63.
- 榎原 寛・林 正美, 1980. 奄美・琉球の生物(5), 昆虫(2). 遺伝, 20(8): 72-79.
- 宮尾嶽雄, 1970. 生態学入門. iii+205 pp. 地域文化研究所, 船橋.
- 野村 鎮, 1966. 琉球列島コガネムシ主科の動物地理学的研究. 桐朋学報, (15): 66-105.
- 佐藤正孝, 1966. 琉球列島をめぐる昆虫の地理的分布, ドロムシ科. 日本昆虫学会第26回大会(名古屋)講演要旨: 34-35.
- 高原健二ほか, 1997. 沖縄の帰化動物. 235 pp. 沖縄出版, 浦添.
- UENO, S.-I., 1974. The trechid beetles of the Ryukyu Islands. *Mem. natn. Sci. Mus., Tokyo*, (7): 157-167.

Summary

The zoogeographical factor of Coleoptera in the Ryukyu Archipelago is extremely complex. The species of Himalayan, Chinese, Japanese, Formosan, Philippine, Southeast Asian and Australian or South Pacific elements seem to have invaded and speciated in the islands at different geological times. Some characteristic species of each element are listed herewith. The immigrant species of the present time is also listed.

The beetles are very diverse and occur in all habitats, though some of them, *viz.* endangered, vulnerable and rare species, are closely connected with particular environment. Their five important factors for the Coleopteran fauna in the Ryukyu Archipelago are indicated as follows: Sea Shores including Coral Reef, Beaches including River Mouth, Mountain Streams and their Banks, Wetlands, Natural Forests and Organic Matters in Forest. Some characteristic species of each habitat are listed herein.

(名古屋女子大学)

○オカモトツヤアナハネムシの興味深い採集例

本年5月, 歩行虫類の採集のために南アルプスを訪れた筆者は, ベイトトラップとライトトラップの両採集で, オカモトツヤアナハネムシ *Pedilus okamotoi* (KONO) を採集した. 通常の採集とは状況の異なる採集例と思われるので, 採集データを報告しておく.

2♂♂, 静岡県静岡市信濃俣林道, 26. V. 2001. 筆者採集・保管. (ベイトトラップ)

1♂, 静岡県静岡市信濃俣林道, 25. V. 2001. 筆者採集・保管. (ライトトラップ)

採集地の信濃俣林道は, 大井川右岸, 畑薙第一ダムから続く全長3~4キロの林道で, 標高は手元の高度計で1,100 m程度を示していた. ベイトトラッ

プは, 林道沿いの幅広い枯れ沢に50個程仕掛けたものであり, 餌はすしのごとカルピスの混合液であった. また, ライトトラップは林道脇の開けた草地に設置したものであり, 他に *Pidonia* などのカミキリムシ, *Themus* や *Athemus*, *Podabrus* などのジョウカイボンが飛来した.

末筆になるが, 採集に同行して下さった金子順一郎氏にお礼申し上げる.

参考文献

- 秋田勝己, 1994. 甲虫ニュース, (105): 3.
- 蟹江 昇, 1990. 昆虫と自然, 25(4): 20-23.
- 露木繁雄, 1992. 甲虫ニュース, (98): 4.
- (群馬県碓氷郡, 佐藤陽路樹)

日本産 *Selatosomus* 属のコメツキムシ科の種について

大平 仁 夫

Notes on the species of the genus *Selatosomus* in Japan
(Coleoptera, Elateridae)

Hitoo ÔHIRA

Abstract: The Japanese species of the elaterid genus *Selatosomus* STEPHENS, 1830 are studied on the female internal reproductive organs. As the result, it is clarified that the Japanese species should be classified into two genera, *Selatosomus* and *Pristilophus*, as indicated below.

日本に分布する *Selatosomus* 属の種の中には、寒冷地系としてよく知られているコガネコメツキやアラコガネコメツキを始め7種ほど分布しており、日本産は現在 TARNAWSKI (1995) の研究に従って、*Selatosomus* s. str. と *Eanoides* と *Pristilophus* の3亜属に分類されている。しかし、この亜属の位置は研究者間で意見の相違があり、KISHII (岸井 尚) (1999) の目録では、*Eanoides* 亜属は属とし、*Selatosomus* 属とは離れた場所に位置させている。

筆者は日本産の種について、主として雌内部生殖器官の形態を調査し、若干の知見を得たのでここに報告する。本文を草するにあたり、この属の位置づけについて種々助言をいただいた東京都の鈴木 互博士に心から感謝の意を表す。なお、内部生殖器官は軟弱で、変形しやすいため、通常は複数個体を調査して、その最も正常と思われるものをここに示した。

Genus *Selatosomus* STEPHENS, 1830 コガネコメツキ属(Type species: *Elater aeneus* LINNÉ, 1758)

雌内部生殖器官の Uterus (以下 Utrs と略) は小形の楕円形状の袋で、内部には硬針や硬板は生じない。Bursa copulatrix (以下 Bcpx と略) は細長い筒状の袋で、基部側と末端側からそれぞれ Accessory gland(s) (以下 AcGI と略) を生じており、基部側の AcGI の末端から伸びる細い腺は Spermatheca に達すると思われる (図では to Sphermatheca と表記)。

1. *Selatosomus (Selatosomus) puncticollis* MOTSCHULSKY, 1866 コガネコメツキ (Figs. 1B; 2D)

北海道とその周辺地域、本州の主として中部山岳地帯 (分布の南限は京都市貴船山) から青森県にかけての高山帯に分布する寒冷地系の代表的な種である。本種の分布や形態の概要は大平・保田 (1998) が報告している。

雌内部生殖器官の Bcpx は細長い筒状の袋で、この内側面には多数の硬針状物を生じているが、図示したように全面には分布していない。また、基部側から伸びる AcGI の末端近くにも、通常少数の硬針を生じている。

調査標本: 1♀, 長野県美ヶ原山, 14. VII. 1954, 大平仁夫採集。

2. *Selatosomus (Selatosomus) gloriosus* (KISHII, 1955) アラコガネコメツキ (Fig. 1C)

前種と同様に寒冷地を代表する種である。北海道では大雪山系、羅臼岳、羊蹄山、利尻岳などが主な産地であるが、本州では鳥海山や早池峰山くらいで、いずれも山頂部に限られている。なお、本種の分布や形態は大平・保田 (1998) が報告している。

雌内部生殖器官の形態は前種にきわめて類似しており、両種が近縁であることが分かる。Bcpx は細長い筒状で、その内側面には前種より幅広く、ほぼ全面に硬針を分布している。また、基部側の AcGI 内には硬針は見られないし、その先端部から伸長している2本の袋状の AcGI は前種より細長い。

調査標本: 1♀, 北海道羊蹄山, 4. VIII. 1989, 保田信紀採集。

3. *Selatosomus (Selatosomus) miyajimanus* (ÔHIRA, 1971) ミヤジマコガネコメツキ (Figs. 1F; 2E)

広島県の宮島から最初に見出された種である。本種は前の2種とは異なって、低地帯でも得られていて、広島県、岡山県、徳島県、愛媛県あたりと、長野県、新潟県、福島県あたりの一帯に分布が知られている。本種の形態や分布の概要は大平・中村 (1998a) が報告している。

雌内部生殖器官の外形はコガネコメツキに類似しており、Bcpx 内の硬針は図示したよう内側の全面には分布していない。また、基部側から伸びる AcGI は細長く、内側面に硬針は見られないし、その先端部から伸長する袋状の2本の AcGI もより細長い。

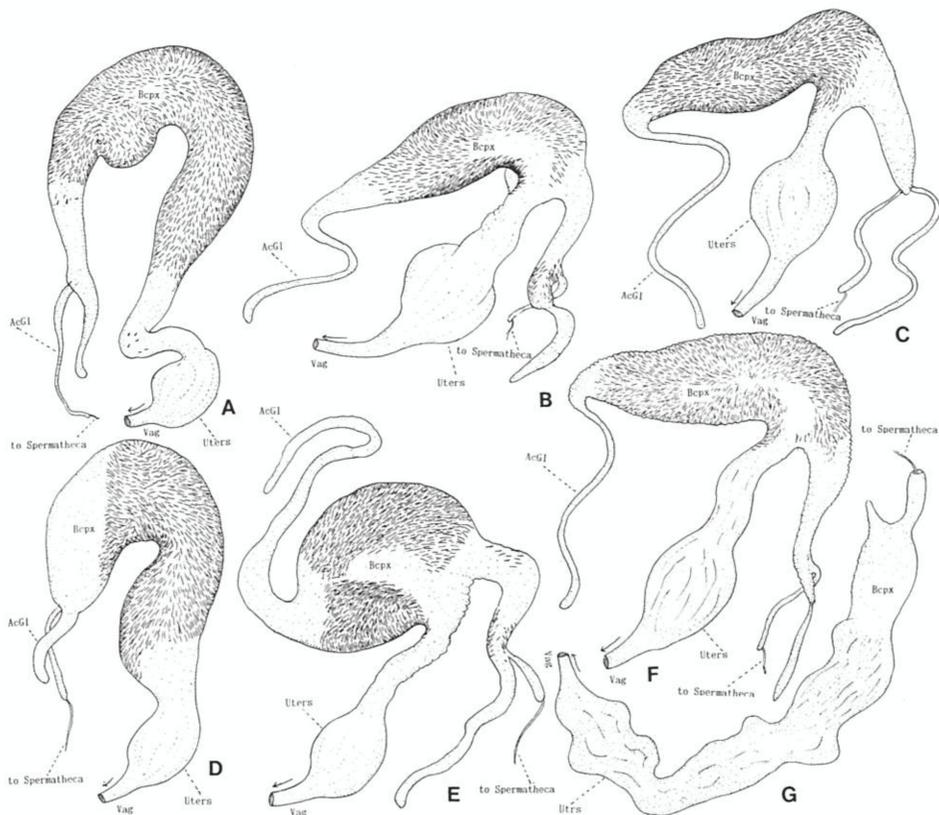


Fig. 1. A-G. Outline of the female internal reproductive organs.

A, *Prostilophus onerosus*; B, *Selatosomus (Selatosomus) puncticollis*; C, *S. (S.) gloriosus*; D, *P. vagipictus*; E, *S. (Eanoides) puerilis*; F, *S. (S.) miyajimanus*; G, *P. melancholicus*.

調査標本: 1♀, 岡山県大平山, 19. V. 1984, 渡辺昭彦採集.

4. *Selatosomus (Eanoides) puerilis* (CANDÈZE, 1873) シリプトヒラタコメツキ (Figs. 1E; 2C)

本州, 四国, 九州の各地に広く分布する種であるが, 周辺の離島では愛媛県の伯方島と鹿児島県の上甕島が知られている. 成虫の形態の概要は大平(1987)が報告している. また, G. LEWIS が長崎で採集した個体は MIWA (三輪勇二郎)(1934)が図示している.

成虫の体長は5 mm くらいから10 mm くらいまでの変異があって, 大型でも雄個体がいるが, このような変異の生じる理由は判明していない. 幼虫は不明であるが, もしかしたら幼虫が特殊な環境で育っているのかも知れない.

KISHII (1999) の目録では, *Eanoides* を独立属として位置させ, *Corymbitodes* 属の近くに並べている. しかし, 筆者が調査した雌内部生殖器の形態は, *Selatosomus* 属に所属する種であり, これは TARNAWSKI (1995) の考えとも一致する.

雌内部生殖器の外形は図示したようで, Bcpx は球状の袋で, 基部側から伸長する AcGI は細長く, 内側面に少数の硬針を分布している. また, 先端部から伸長する袋状の AcGI は上方に湾曲して伸びているが, この長さはより短いのもあって, 変異が見られる.

調査標本: 1♀, 愛知県豊川市, 5. V. 1965, 大平仁夫採集.

Genus *Pristilophus* LATREILLE, 1834

(Type species: *Elater melancholicus* FABRICIUS, 1798)

雌内部生殖器の Utrs は球形の袋で, 内部には硬針や硬板は生じない. Bcpx は筒状の袋で, 末端部から2本の AcGI を生じ, その中の1本の末端からさらに細い AcGI が伸びていて, 先は Spermatheca に達すると思われる.

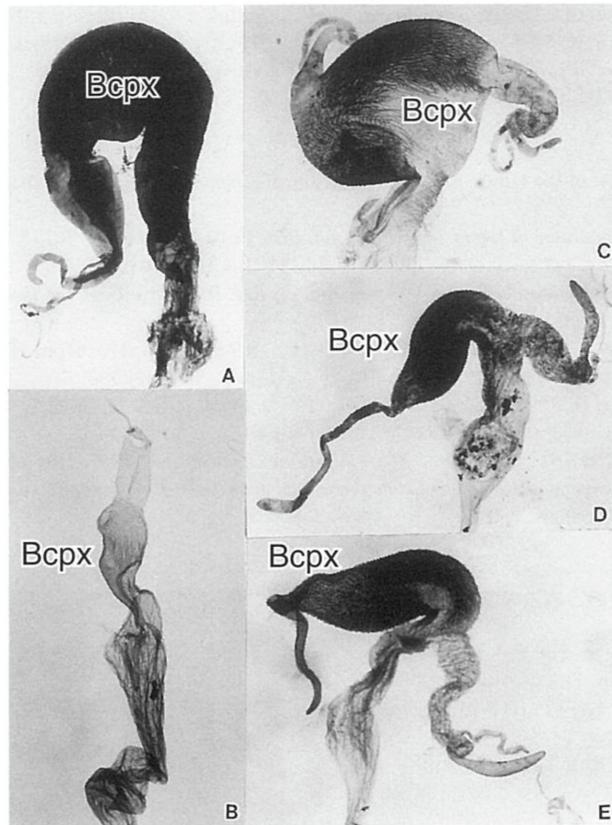


Fig. 2. Photograph of the female internal reproductive organs.

A, *Pristilophus onerosus*; B, *P. melancholicus*; C, *Selatosomus (Eanoides) puerilis*; D, *S. (Selatosomus) puncticollis*; E, *S. (S.) miyajimanus*.

筆者は *Pristilophus* 属の基準種に指定されている *P. melancholicus* の雌内部生殖器官を調べたが、図示 (Figs. 1G; 2B) したように、Bcpx 内面には硬針は生じておらず、一見きわめて異質な印象であった。しかし、Bcpx は細長い筒状で、末端部から 2 本の AcGI が生ずるなどは *Pristilophus* 属の特徴を有しているように思われる。また、この属は将来はさらに幾つかの属または亜属に分割も必要と考えられる。

1. *Pristilophus onerosus* (LEWIS, 1894), **comb. nov.** トラフコメツキ (Figs. 1A; 2A)

本種の分布や形態の概要は大平・中村 (1998b) が報告している。幼虫は大平 (1962) が明らかにしている。成虫の体長は一般に 10 mm 内外であるが、雌では 17 mm 内外に達するのがある。G. LEWIS (1894) が東京から *Corymbites pacatus* と命名、新種として記載した種は、そのごの三輪 (1933) の報告にあるように、本種と同種と思われる。しかし、TARNAWSKI (1995) は別種として成虫図を示し、触角の第 3 節の相違なども示している。岸井 (1999) の目録でも別種扱いになっている。

TARNAWSKI (1995) は *Pristilophus* 属は *Selatosomus* 属の亜属として扱っているが、ここに示した雌内部生殖器官の形態からも分かるように、*Selatosomus* 属とは異なる系統で、独立した属であると考えられる。成虫では触角が細長く、末端に数珠状の連結にならないし、幼虫も両属間では著しい相異が見られる。

TARNAWSKI (1995) は *Pristilophus* グループの種を、3 つの小グループに分類しており、日本産の 2 種を始め、上翅が黄橙色で黒斑のあるものを第 2 小グループに含めている。

雌内部生殖器官の形態は図示したように、細長い筒状の Bcpx 内側面には多数の硬針を分布し、末端部から 2 本の AcGI を生じていて、その中の 1 本の末端からさらに細い腺が伸び、その先は Spermatheca に達していると考えられる。

調査標本: 1 ♀, 福岡県筑紫野市, 28, IV, 1971, 北野龍海採集。

2. *Pristilophus vagepictus* (LEWIS, 1894), **comb. nov.** ウストラフコメツキ (Fig. 1D)

本種も前種と類似した分布をしていて、本州、四国、九州の各地から知られているが、周辺の離島からの記録

はない。一般に河川敷の砂壤土質のところに分布していて、幼虫もその周辺の砂壤土中に生息している。

雌内部生殖器の外形は前種に類似しているが、Bcpx はより太短い筒状で、硬針もより狭い範囲に分布している。また、末端部の AcGl は前種より短大である。

調査標本: 1♀, 愛知県豊川市, 5, V, 1994, 大平仁夫採集。

引用文献

- KISHII, T., 1999. A check-list of the family Elateridae from Japan (Coleoptera). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (42): 1-144.
- LEWIS, G., 1894. On the Elateridae of Japan. *Ann. Mag. nat. Hist.*, (6)13: 155-166.
- 三輪勇四郎, 1933. 九州帝国大学農学部昆虫学教室所蔵の叩頭虫標本 (II). *Mushi*, 6 (2): 66-73.
- MIWA, Y., 1934. The fauna of Elateridae in the Japanese Empire. *Rep. Dep. Agric. Govt. res. Inst. Formosa*, (65): 1-289, 9 pls.
- 大平仁夫, 1962. 日本産コメツキムシ科の幼虫の形態学的ならびに分類学的研究. 1-179, 61 pls. (岡崎: 自刊)
- 大平仁夫, 1987. 三河地方から採集されるコメツキムシについて. *佳香蝶*, 39 (149): 7-8.
- 大平仁夫・中村慎吾, 1998a. 広島県のコメツキムシ類の記録 (12). *比婆科学*, (184): 21-23, pl. I.
- 大平仁夫・中村慎吾, 1998b. 同上 (13). 同上, (187): 17-20, pls. I-II.
- 大平仁夫・保田信紀, 1998. 層雲峽とその周辺のコメツキムシ (8). 層雲峽博物館研究報告, (18): 33-37, pls. I-II.
- TARNAWSKI, D., 1995. A revision of the genus *Selatosomus* STEPHENS, 1830 (Coleoptera: Elateridae: Athoinae: Ctenicerini). *Genus (Suppl.)*, Wroclaw: 1-183.

(愛知県岡崎市)

○オオトラカミキリの生態と成虫の室内観察による若干の知見

従来, 知られていなかったオオトラカミキリ *Xylotrechus villioni* (VILLARD, 1892) の生態, 成虫の室内飼育下の行動について若干の知見を得たので報告したい。

観察場所・年月日: 山梨県下部町, 2000年9月10日。

蛹室位置: 幼虫は通常, 樹皮下形成層付近を穿孔し, その後, 蛹化前に木材部に侵入し, 蛹室を作ることが知られている。筆者らは胸高直径約30cmのモミ主幹部, 地上高約150cmの健全木の樹皮下において, 羽化直前の蛹を確認した(写真)。幼虫の樹脂対策と考えられている渦巻状食痕が小規模であったこととの関連も考えられるが, 幼虫飼育の観察でもこのように樹皮下に蛹室をつくる例が確認されていないことから, かなり異例なことなのかもしれない。

捕食天敵: 幼虫期において鳥類(キツキ類)による捕食が確認されているが, 昆虫類による捕食(天敵)は知られていない。前途の蛹を採集したところ, 肩部が変色していることに気づき, 蛹室を再度調べたところ, コメツキムシ科の幼虫を認め, 捕食中であつたことを確認した。なお, 不覚にもこの幼虫は採集時に落としてしまい, どのグループのコメツキムシかまでの確認には至らなかった。

また, 当日採集した♀成虫を高さ30cmほどのモミ鉢植えにとめ, 室内でその行動を観察したところ, 一見, 不安定そうに思えるモミの葉上を巧みに歩行することに驚かされた。成虫の生活圏での適応であることがうかがえる。さらに, 本種の色彩は, ある種のスズメバチ類に類似していることは周知の事実であるが, モミの葉の形状と本種の鞘翅の斑紋



オオトラカミキリの蛹室(矢印)

は双方ともに「人」型をしており, 周辺の照度やバックグラウンドなどのある種の条件下では, モミ枝先の樹・葉形にとけ込んでしまう保護色になっているように思われた。他の昆虫でも知られているように, 最初は保護色, 気付かれたら警戒色といったパターンを示しているのかもしれない。

末筆ではあるが, ご教示いただいた日本大学の岩田隆太郎博士, 石川県林業試験場の江崎功二郎氏, 当日, 調査に同行され, 筆者らの成虫採集を落ち込みながらも祝福してくれた伊藤弥寿彦, 高尚均の両氏にお礼申し上げる。

参考文献

- 岩田隆太郎, 1990. 針葉樹一次穿孔性害虫オオトラカミキリの研究 (I). 第100回日林論: 525-528.
- 岩田隆太郎, 1991. オオトラカミキリの生態. *インセクトリウム*, 28(4): 4-9.

(神奈川県横浜市, 日下部良康)
(神奈川県横浜市, 簡野嘉彦)

日本産クロマメゲンゴロウ類の分布

記野 直人・長谷川 洋

日本産のクロマメゲンゴロウ類は、稀な種ではないが、一般のゲンゴロウ類とはやや異なり、林道脇や林内の落ち葉の多い浅い水たまりや溪流脇の流れのよどんだところなどに主に生息している。従来、北海道・本州などにクロマメゲンゴロウ、四国にホソクロマメゲンゴロウ、本州にコクロマメゲンゴロウが分布するとされてきたが、ホソクロマメゲンゴロウが本州にも広く分布することが指摘された（森・北山, 1993）。その後、NILSSON (1996) により山形県鳥海山からチョウカイクロマメゲンゴロウ (*Agabus ikedai* NILSSON) が記載され、同時に従来クロマメゲンゴロウの学名とされてきた *A. optatus* SHARP がタイプ標本の調査の結果ホソクロマメゲンゴロウであるとされ、新たにクロマメゲンゴロウの学名として *A. nakanei* NILSSON が採用された。さらに NILSSON (2000) はマメゲンゴロウ族の再検討を行い、クロマメゲンゴロウ類はモンキマメゲンゴロウ属 *Platambus* に移された。

これら4種は、外観上互いにきわめてよく似ており、オス交尾器によるほかは同定がかなり難しいが、次の区別点を総合して判断すれば可能である。

- 1) 後胸腹板翼部の幅は、クロマメ>ホソクロマメ>チョウカイクロマメ>コクロマメの順である。
- 2) クロマメは、背面が他に比べより膨隆し、体型も楕円形となる。その他の種はクロマメに比べ背面はより扁平であり、体型は逆卵形となる。
- 3) コクロマメは他に比べ小型である。
- 4) ホソクロマメ、チョウカイクロマメのメスの背面はしわがあり光沢がない個体が多いが、ホソクロマメに関しては光沢のある個体もある。また、クロマメのメスの背面は光沢があるが、知床周辺のメスは光沢がなく体型的にもホソクロマメに似ていて興味深い。

筆者らは、クロマメゲンゴロウ類の分布について調査してきたが、ある程度のデータが集まってきたので、それについて報告したい。なお、従来、本州に産するものは「クロマメ」と考えられ、交尾器等を調べずに記録されてきたものが多いので、文献記録はすべて再検討する必要があると思われる。

クロマメゲンゴロウは、北海道、本州、九州および伊豆諸島（三宅島）のデータを確かしてきた。森・北山 (1993) によると、トカラ中ノ島からも確認されている。北海道では低地にも産するが、本州では基本的に山地帯に産し、次種ホソクロマメよりも北・高地に分布しているようであり、西日本からの記録は少ない。福島県吾妻山では、標高650~700mの2カ所でホソクロマメと混生しているのを確認したが、標高1,000mでは本種のみであった。また、吾妻山以外での混生地は確認していない。例外的に栃木県大田原市、鹿児島県志布志町などの低地でも記録されているが、大田原市の場合は蛇尾川のよどみで得られたので、洪水時などに上流から流されてきたとの推測も可能である。なお、東北地方南部から中部地方での経験によると、標高1,500m付近まで登るとクロマメ類は採集できなくなる。

ホソクロマメゲンゴロウは、本州、四国、九州および伊豆八丈島から記録されている。基本的に山地に産するが、クロマメと比べるとより低いところに、また南西部に偏って分布しているようである。また、静岡県西部から愛知県東部地域では低地で記録されており、興味深い。

チョウカイクロマメゲンゴロウは、現在までのところ鳥海山のみで記録されている。秋田県側の鳥海山北麓での調査によると、標高500~700m付近ではチョウカイクロマメが分布し、標高300m付近ではホソクロマメであった。また、ホソクロマメとの中間的な個体群も生息しており、雑種の可能性が示唆される。なお、鳥海山に近い栗駒山、月山ではチョウカイクロマメを発見することはできなかった。

コクロマメゲンゴロウは本州の山地に点々と分布している。基本的にクロマメ、ホソクロマメなどと棲み分けをしているようである。福島県田島町中山峠と群馬県西部では混生を確認しているが、混生地は余り多くないようであり、栗駒山などではごく近い地点でホソクロマメとコクロマメが採集できたが、混生は確認できなかった。

クロマメゲンゴロウ *Platambus nakanei* NILSSON

北海道斜里町金山川, 26. VI. 1994, 1♀, 記野採集; 同所, 26. VI. 1994, 1♀, 長谷川採集; 同所, 23. VIII. 1992, 1ex., 森正人採集; 北海道斜里町ウトロ, 23. VIII. 1992, 5exs., 森 正人採集; 同所, 23. VIII. 1992, 11 exs., 北山 昭採集; 北海道知床, 30. IX. 1999, 5♂♂1♀, 上手雄貴採集; 北海道標津町, 22. IX. 1999, 1♂, 上手雄貴採集; 北海道滝上町上札久留, 24. X. 1999, 2♂♂, 上手雄貴採集; 北海道留辺蘂町大和, 2. X. 1999, 3♂♂, 上手雄貴採集; 北海道釧路市びしゃもん川, 4. X. 1996, 1♀, 北野 忠採集; 北海道土幌町十勝三股, 6. VII. 1995, 1♀, 森 正人採集; 北海道東川町幌倉沼, 12. V. 1993, 4♂♂4♀♀, 長谷川採集; 北海道上川町愛山溪, 30. VIII. 1999, 2♂♂, 石黒昌貴採集; 北海道中川町共和, 26. VIII. 1999, 10♂♂1♀, 石黒昌貴採集;

北海道厚田村, 5. V. 1991, 12exs., 森 正人採集; 同所, 16. V. 1991, 2exs., 森 正人採集; 北海道恵庭市漁川, 2. XI. 1986, 1ex., 森 正人採集; 同所, 12. X. 1986, 9exs., 森 正人採集; 同所, 24. VIII. 1992, 3exs., 森 正人採集; 北海道恵庭溪谷, 12. X. 1986, 3exs., 森 正人採集; 北海道札幌市中ノ沢, 2. XI. 1986, 1ex., 森 正人採集; 北海道札幌市百松沢, 26. X. 1986, 3exs., 森 正人採集; 北海道札幌市豊平峡, 16. VI. 1986, 2exs., 森 正人採集; 北海道札幌市定山溪, 23. VII. 1977, 1ex., 森 正人採集; 北海道苫小牧市口無沼, 6. VII. 1986, 1ex., 森 正人採集; 北海道苫小牧市美笛峠, 16. VI. 1986, 1ex., 森 正人採集; 北海道苫小牧市, 8. VII. 1995, 3exs., 森正人採集; 北海道早来町遠浅, 20. VII. 2000, 2♂♂7♀♀, 記野採集; 同所, 20. VII. 2000, 1♂9♀♀, 長谷川採集; 北海道苫前町上手, 24. V. 1989, 1♂, 西田貞二採集; 北海道赤平市大谷沢, 16. V. 1990, 5exs., 西田貞二採集。

青森県八甲田山田代平, 6. VI. 1992, 3♀♀, 記野採集。

秋田県八幡平, 5. VI. 1992, 1♂, 記野採集。

山形県朝日村月山(700 m), 22. V. 1999, 1♂, 記野採集。

福島県吾妻山吾妻スキー場(1,000 m), 27. V. 2000, 5♂♂2♀♀, 記野採集; 同所, 27. V. 2000, 3♂♂2♀♀, 長谷川採集; 福島県福島市土湯(650 m), 27. V. 2000, 1♂, 記野採集; 同所, 27. V. 2000, 1♂, 長谷川採集; 福島県福島市微温湯(700 m), 27. V. 2000, 2♂♂, 記野採集; 福島県湯ノ花, 6. VI. 1988, 1♂, 記野採集。

茨城県里美村里川, 30. V. 1987, 1♀, 記野採集。

栃木県大田原市今泉蛇尾川, 18. VI. 1994, 1♂1♀, 記野採集; 同所, 26. IV. 1997, 6♂♂4♀♀, 記野採集; 同所, 26. IV. 1997, 1♀, 長谷川採集。

群馬県水上町湯原 I. VII. 2000, 1♂, 長谷川採集。

東京都三宅島友池, 14. V. 1999, 1♂1♀, 杉原採集。

長野県松本市扉温泉, 15. VI. 1991, 1♂, 北山 昭採集; 長野県松本市扉ダム, 25. X. 1998, 3♂♂8♀♀, 石黒昌貴採集; 長野県坂巻温泉, 31. VII. 1992, 3exs., H. 山崎採集。

山梨県双葉町菖蒲沢泉溜池, 31. X. 1993, 1♂2♀♀, 北野 忠採集。

岐阜県坂内村, 20. VII. 1992, 1♂, 森 正人採集。

愛知県豊根村茶白山, 5. X. 1998, 1♂, 石黒昌貴採集。

兵庫県温泉町前, 28. X. 1992, 5exs., 北山 昭採集; 同所, 28. X. 1992, 15exs., 森正人採集。

鹿児島県志布志町帖, 30. III. 1999, 1♀, S. INADA 採集。

ホソクロマメゲンゴロ *Platambus optatus* SHARP

秋田県皆瀬村栗駒山(700 m), 15. IX. 2000, 10♂♂5♀♀, 記野採集; 同所, 15. IX. 2000, 2♂♂10♀♀, 長谷川採集; 秋田県仁賀保町中島台, 16. IX. 2000, 9♂♂5♀♀, 記野採集; 同所, 16. IX. 2000, 6♂♂8♀♀, 長谷川採集; 秋田県仁賀保町桂坂(250 m), 24. V. 1998, 1♂6♀♀, 記野採集; 同所, 15. IX. 2000, 2♂♂2♀♀, 記野採集; 同所, 15. IX. 2000, 1♀, 長谷川採集; 秋田県象潟町横岡, 19. V. 1996, 2♂♂, 長谷川採集。

宮城県花山村栗駒山(700 m), 15. IX. 2000, 2♂♂5♀♀, 記野採集; 同所, 15. IX. 2000, 6♂♂15♀♀, 長谷川採集。

山形県朝日村大網, 22. V. 1999, 2♂♂, 長谷川採集; 山形県烏海山奥山林道, 21. VII. 1993, 4exs., T. IKEDA 採集; 山形県立川町立谷沢山, 21. VII. 1995, 2exs., Y. FUJITA 採集; 同所, 16. VI. 1994, 2exs., Y. FUJITA 採集。

福島県福島市土湯(650 m), 27. V. 2000, 3♂♂, 記野採集; 同所, 27. V. 2000, 3♀♀, 長谷川採集; 福島県福島市微温湯(700 m), 27. V. 2000, 1♂, 記野採集; 福島県楡枝岐, 5. VI. 1988, 1♂, 長谷川採集; 福島県塙町那倉, 11. V. 1991, 2♂♂2♀♀, 記野採集; 同所, 11. V. 1991, 1♀, 長谷川採集; 福島県館岩村中山峠(1,100 m), 17. VI. 2000, 1♂2♀♀, 記野採集; 同所, 17. VI. 2000, 7♂♂4♀♀, 長谷川採集; 福島県田島町中山峠(1,100 m), 17. VI. 2000, 3♂♂5♀♀, 記野採集; 同所, 17. VI. 2000, 13♂♂3♀♀, 長谷川採集; 福島県郡山市 Ohse, 1. VII. 1992, 3exs., M. KIMURA 採集; 福島県甲子温泉, 18. V. 1991, 1♀, 記野採集; 同所, 11. V. 1996, 6♂♂1♀, 記野採集; 同所, 11. V. 1996, 1♀, 長谷川採集; 福島県白河市白坂, 11. V. 1996, 2♂♂4♀♀

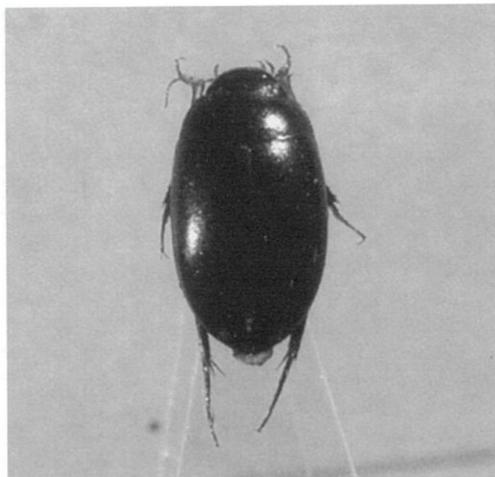


図1. クロマメゲンゴロウ。

♀, 記野採集; 同所, 11. V. 1996, 3♂♂
♂1♀, 長谷川採集.

茨城県花園山, 30. V. 1987, 1♀, 記
野採集; 茨城県里美村岡尾, 25. V.
1996, 6♂♂5♀♀, 記野採集; 同所,
25. V. 1996, 5♂♂3♀♀, 長谷川採
集.

群馬県水上町湯ノ小屋林道, 3. VI.
1995, 4♂♂2♀♀, 記野採集; 同所,
3. VI. 1995, 3♂♂2♀♀, 長谷川採集;
同所, 4. VII. 1998, 1♂♂4♀♀, 長谷川
採集; 群馬県利根村丸沼, 5. VII.
1997, 6♂♂3♀♀, 記野採集; 群馬県
上野村中ノ沢, 5. VIII. 2000, 1♀, 長
谷川採集; 群馬県新治村赤沢, 1. VII. 2000, 4♂♂2♀♀, 記野採集; 同所, 1. VII. 2000, 2♂♂, 長谷川採集.

東京都伊豆八丈島, 18. IV. 1995, 1ex., K. OHKUBO 採集.

新潟県松之山町大巖寺高原, 30. V. 1992, 1♀, 長谷川採集.

長野県小谷温泉, 1. VII. 1992, 1♂, 北山健司採集; 同所, 5. VI. 1994, 1♂1♀, 記野採集.

山梨県奥秩父乙女高原, 20. V. 1995, 1♀, 記野採集; 山梨県奥秩父木賊峠, 16. V. 1998, 2♂♂, 記野採集.

静岡県富士宮市小田貫湿原, 25. VI. 2000, 4♂♂2♀♀, 北野 忠採集; 静岡県浜北市堀谷, 30. III. 1997, 2♀♀, 北野 忠採集; 静岡県引佐町霧山, 2. VII. 2000, 2♂♂4♀♀, 北野 忠採集; 静岡県湖西市新所, 18. VIII. 1996, 2♀♀, 北野 忠採集; 同所, 1. IX. 1999, 1♂♂4♀♀, 北野 忠採集; 静岡県雄踏町, 17. VI. 1998, 4♀♀, 北野 忠採集; 静岡県浜松市神ヶ谷町, 17. V. 1998, 1♂1♀, 北野 忠採集.

愛知県春日井市明知町, 5. II. 1994, 1♂, 北野 忠採集; 同所, 4. III. 1995, 1♀, 北野 忠採集; 愛知県足助, 3. IX. 1984, 1ex., M. KIMURA 採集; 愛知県稲武町月ヶ平, 5. X. 1998, 2♂♂2♀♀, 石黒昌貴採集; 愛知県岡崎市小呂町, 13. VI. 1999, 1♂, 大平仁夫採集.

岐阜県河合村檜峠, 29. V. 1998, 1ex., 森 正人採集; 岐阜県坂内村, 20. VII. 1992, 1♀, 森 正人採集.

三重県菟野町湯ノ山, 25. X. 1998, 1♂, 石黒昌貴採集.

滋賀県大津市堅田, 4. VI. 1992, 1ex., 森 正人採集; 滋賀県甲賀町, 23. III. 1990, 16exs., 森 正人採集;

滋賀県比良山八雲池とその周辺湿地, 24. VI. 1994, 6exs., 北山昭採集; 滋賀県信楽町御奇峠, 12. X. 1998, 2♂♂2♀♀, 石黒昌貴採集.

京都府宇治市天瀬, 11. V. 1992, 1♀, 森 正人採集; 京都府弥栄町, 15. V. 1990, 2exs., 森 正人採集; 同所, 14. IV. 1990, 2exs., 森 正人採集; 京都府夜久野町, 15. II. 1993, 5exs., 森 正人採集.

大阪府能勢町深山, 21. X. 1997, 1♂1♀, 森 正人採集; 大阪府豊能町妙見奥の院, 28. V. 1996, 3exs., 北山昭採集; 大阪府能勢町上山辺, 30. VI. 1991, 1♂, 八木剛採集.

兵庫県千種町峰越峠 (100 m), 30. VIII. 1997, 11exs., 森 正人採集; 同所, 6. VII. 1997, 4exs., 森 正人採集; 兵庫県一宮町小原, 6. IX. 1995, 12exs., 森 正人採集; 兵庫県相生市, 28. IV. 1991, 4exs., 森 正人採集; 兵庫県大河内町砥ノ峰, 29. V. 1987, 4exs., 森 正人採集; 兵庫県神戸市六甲山上, 22. IV. 1987, 10exs., 森 正人採集; 兵庫県宝塚市丸山湿原, 23. III. 1994, 2exs., 森 正人採集; 兵庫県関宮町出合, 18. V. 1991, 3exs., 北山昭採集.

岡山県総社市, 15. IV. 1994, 2♂♂, 森 正人採集; 岡山県奥津町, 16. IV. 1991, 4exs., 森 正人採集; 岡山県川上村徳山, 18. X. 1990, 1ex., 森 正人採集; 同所, 22. VII. 1990, 12exs., 森 正人採集; 岡山県川上村上徳山, 8. VI. 1991, 8exs., 北山 昭採集; 岡山県川上村中原, 8. VI. 1991, 8exs., 北山 昭採集.

島根県吉田村, 15. VI. 1994, 5exs., 北山 昭採集.

愛媛県宇和島市成川溪谷, 3. V. 1992, 3♂♂, 森 正人採集; 愛媛県成川溪谷, 3. V. 1992, 1♂, 北山 昭採集.

佐賀県厳木町作礼山, 20. V. 1992, 3♂♂, K. 大塚採集; 佐賀県背振村背振山頂, 15. X. 1993, 3♂♂2♀♀, K. OHTSUKA 採集.

チョウカイクロマメゲンゴロウ *Platambus ikedai* NILSSON

秋田県仁賀保町中島台, 19. V. 1996, 9♂♂4♀♀, 記野採集; 同所, 19. V. 1996, 6♂♂1♀, 長谷川採集; 同所, 23. V. 1998, 5♂♂6♀♀, 記野採集; 同所, 23. V. 1998, 5♂♂5♀♀, 長谷川採集.

山形県鳥海山奥山林道, 3. X. 1993, 1♂♂2♀♀, T. IKEDA 採集; 同所, 24. VII. 1993, 1♂, T. IKEDA 採集.

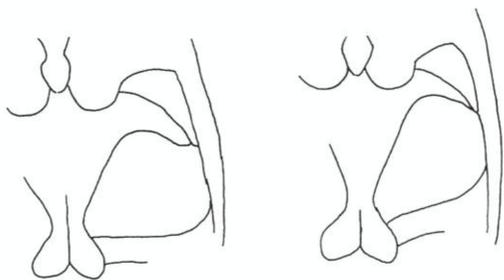


図2. 後胸腹版翼部. 左: クロマメゲンゴロウ, 右: チョウカイクロマメゲンゴロウ.

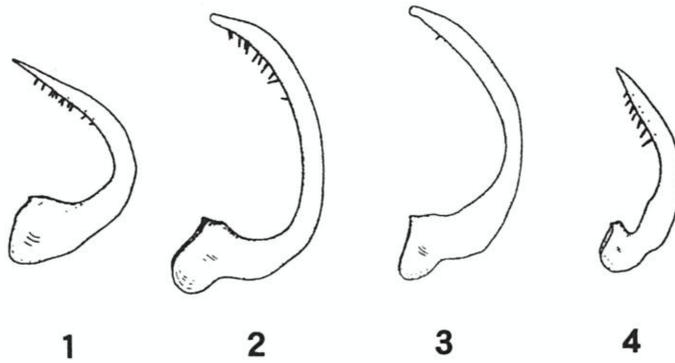


図3. クロマメゲンゴロウ類の♂交尾器中央片. 1: クロマメゲンゴロウ, 2: ホソクロマメゲンゴロウ, 3: チョウカイクロマメゲンゴロウ, 4: コクロマメゲンゴロウ. (NILSSON, 1996 より)



図4. クロマメゲンゴロウ類の分布図.

コクロマメゲンゴロウ *Platambus insolitus* SHARP

宮城県花山村栗駒山, 15. IX. 2000, 1 ♀, 記野採集.
 福島県田島町中山峠, 17. VI. 2000, 1 ♀, 記野採集; 福島県白河市関山, 11. V. 1996, 1 ♂, 記野採集.
 栃木県塩原町上塩原, 17. VI. 2000, 6 ♂♂ 3 ♀♀, 記野採集; 同所, 17. VI. 2000, 1 ♀, 長谷川採集.
 群馬県水上町湯原, 1. VII. 2000, 1 ♂, 記野採集; 群馬県松井田町霧積, 5. VIII. 2000, 1 ♂ 7 ♀♀, 記野採集;
 同所, 5. VIII. 2000, 1 ♂ 3 ♀♀, 長谷川採集; 群馬県上野村中ノ沢, 5. VIII. 2000, 2 ♂♂, 記野採集.
 埼玉県大滝村中津川林道, 8. VIII. 1998, 2 ♂♂ 1 ♀, 長谷川採集.

長野県松本市扉ダム, 25. X. 1998, 1♂, 石黒昌貴採集。
 山梨県奥秩父木賊峠, 23. VIII. 1986, 3♂♂3♀♀, 記野採集; 同所, 23. VIII. 1986, 2♂♂4♀♀, 長谷川採集; 同所, 9. V. 1987, 2exs., 記野採集; 山梨県奥秩父乙女高原, 20. V. 1995, 1♀, 記野採集; 同所, 20. V. 1995, 1♀, 長谷川採集; 山梨県増富, 16. V. 1998, 1♂, 長谷川採集。
 三重県亀山市野登山, 18. III. 1997, 3exs., 森 正人採集; 三重県小岐須峠, 9. VIII. 1998, 3♂♂1♀, 石黒昌貴採集。
 滋賀県永源寺町石樽峠, 18. X. 1995, 10exs., 森 正人採集; 同所, 8. VIII. 1995, 15exs., 森 正人採集。

ホソクロマメは東北地方では栗駒山, 鳥海山まで記録されているが北限はどこになるのか, チョウカイクロマメは鳥海山以外にも分布しているか, また, 本州西部・九州・四国等におけるクロマメの分布, 伊豆諸島, トカラ等における分布など, 今後のさらなる調査が必要な点がある。

最後になったが, 貴重な標本・データを提供していただいた石黒昌貴・上手雄貴・北野 忠・森 正人の各氏に厚くお礼申し上げる。また, 北山 昭氏にはこれまでいろいろとご教示いただき, 今回の報告に当たっても貴重な資料やデータを提供していただいたが, 2001年1月に急逝された。謹んで氏にこの報文を捧げたい。

参考文献

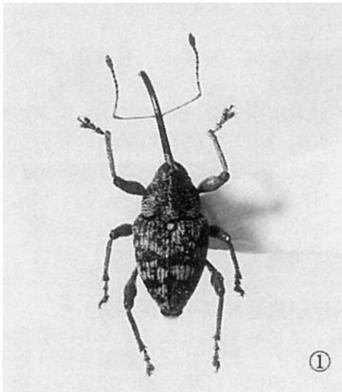
- 森 正人・北山 昭, 1993. 図説日本のゲンゴロウ, 文一総合出版。
 NILSSON, A. N., 1996. A redefinition and revision of the *Agabus optatus*-group (Coleoptera, Dytiscidae); an example of Pacific intercontinental dijunction. *Ent. Basil.*, 19: 621-651.
 NILSSON, A. N., 2000. A new view on the generic classification of the *Agabus*-group of the Agabini, aimed at solving the problem with a paraphyletic *Agabus* (Coleoptera, Dytiscidae). *Koleopt. Rdsch.*, 70: 17-36.

(記野: 埼玉県所沢市)
 (長谷川: 東京都武蔵野市)

○熊本県阿蘇山で採集した, ヤシャブシを利用するシギゾウムシ2種の記録

熊本県阿蘇山において, 従来九州からはほとんど記録されていないと思われるシギゾウムシを2種採集しているので, 記録を報告する。

1. *Curculio cerasorum* (PAYKULL) キマダラシギゾウムシ
 2♂♂1♀, 熊本県白水村阿蘇山上, 13. VIII. 1999, 筆者採集, 保管。(写真1)



阿蘇山噴火口に向かうロープウェイの阿蘇山西駅の南側斜面において, ヤシャブシ灌木をピーティングして採集した。本種はヤシャブシの実を宿主に利用することがすでに飼育によって確認されており(野津, 1986), 当地でもヤシャブシの果実内に産卵

するものと思われる。本種が九州に産する事は既に報告されており (MORIMOTO, 1962), 筆者も愛媛大学の昆虫学教室に大分県産の標本が収蔵されているのを確認している。しかし, 具体的な採集データを伴った記録は発表されておらず, 本報告が初めてのものと思われる。

2. *Curculio okumai* MORIMOTO ツヤヒメシギゾウムシ
 9♂♂13♀♀, 熊本県白水村阿蘇山上, 10-11. X. 1998, 筆者採集, 筆者および森本桂博士保管。(写真2)



神奈川県西丹沢産の標本をもとに記載された種で (MORIMOTO, 1981), その後, 基産地以外からは和歌山県安堵山 (的場, 1999) からのみ報告されているようである。基産地の標本との比較はまだ行ってい

ないが、上記種名をあてておく。

西丹沢ではヤシャブシから多数採集されているが(野津, 1983), 当地でも前種が採集された同じ場所で、ヤシャブシから採集できた。現地での観察では、主にヤシャブシの雄花の蕾上で見られ、交尾中のものや、蕾に口吻を差し込んでいる個体も見られた。蕾を持ち帰り割ってみたところ、口吻によって開けられたと思われる孔とともに、蕾の芯の部分に卵らしきものも確認した。飼育による幼虫、成虫の確認は行っていないが、状況証拠から考えて(採集時には、他のシギゾウムシ類をはじめ、蕾の芯にまで達する孔を開け、産卵できるような昆虫類を確認していない)、本種が産卵したものである可能性がきわめて高い。近縁と思われる2種類のシギゾウムシが同じ植物を利用しつつも、成虫の活動時期や産卵部位を違え、同所的に分布していると考えられ、興味深い。

末筆になったが、日頃からシギゾウムシ全般についてご指導頂いており、本原稿のチェックもして頂いた森本 桂博士(九州大学)、文献についてご恵与、ご教示頂いた野津 裕氏(神奈川県平塚市)、的場 績氏(和歌山県立自然博物館)、標本写真の撮影をして頂いた久米加寿徳氏(高松市)、採集に同行して頂いた加藤俊明(長崎県佐世保市)、島村 聡、山添寛治、長谷川匡弘、長副 聡(以上、九州大学)の各氏に、厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 的場 績, 1999. 和歌山県山ゾウムシ科目録. 和歌山県立自然博物館報, (17): 29-51.
 MORIMOTO, K., 1962. Revision of the subfamily Curculioninae from Japan II. *Mushi, Fukuoka*, 36(4): 21-40.
 MORIMOTO, K., 1981. On some Japanese Curculioninae (Coleoptera: Curculionidae). *Esakia, Fukuoka*, (17): 109-130.
 野津 裕, 1983. シギゾウムシの生態. すかしば, (20): 21-23.
 野津 裕, 1986. クリシギゾウムシなどの寄主植物. 月刊むし, (188): 37-38.
 (香川県丸亀市, 藤本博文)

○奄美大島からのツヤアトキリアリヅカムシの記録

Batraxis splendida NOMURA ツヤアトキリアリヅカムシは西表島より記載された種で(NOMURA, 1986), これまで韓国(NOMURA & LEE, 1993), 徳之島, 沖縄本島(NOMURA, 1996)からの記録がある。また、西表島と韓国産の個体は *Brachyponera chinensis* (EMERY) オオハリアリのコロニーより得られている。

筆者は東京農業大学昆虫資源学研究室の岸本年郎博士のご厚意により奄美大島産の本種を検査する機会に恵まれたので報告する。2♂♂2♀♀, 奄美大島赤土山公園, 2. V. 1992, 岸本年郎採集, 筆者保管。なお採集状況に関しては不明である。

末筆ながら、日頃からお世話になり、本種に関する

情報をご教示頂いた国立科学博物館の野村周平博士、貴重な標本を恵下さった東京農業大学の岸本年郎博士に心より御礼申し上げます。

引用文献

- NOMURA, 1986. Descriptions of two new myrmecophilous species of the family Pselaphidae (Coleoptera) from Japan. *Kontyû, Tokyo*, 54: 498-503.
 NOMURA, 1996. New records of *Batraxis splendida* NOMURA (Pselaphidae, Goniacerinae) from Tokunoshima and Okinawa-hontô Islands, Ryukyus, Japan. *Elytra, Tokyo*, 24: 374.
 NOMURA & LEE, 1993. A revision of the family Pselaphidae (Coleoptera) from South Korea. *Esakia, Fukuoka*, (33): 1-48.

(東京農大, 新井志保)

○蔵王におけるシリグロオオキノコの採集例

奈良県以外では採集例の少ないシリグロオオキノコ *Dactylotritoma atricapilla* (LEWIS) を蔵王で採集したので報告する。

5頭, 宮城県蔵王町宮城蔵王澄川沿い, 9. VII. 2000, 木元達之助採集。

古い伐採木に生じたスギヒラタケに似たキノコから採集した。当地は標高1,200~1,500 mのミズナラにツガ類やガケカンバが混じる森林地帯である。

(東京都足立区, 木元達之助)

◇原稿の募集◇

原稿を募集しています。送付先は下記のとおりです。☎196-0012 東京都昭島市つつじが丘2-6-22-806 妹尾俊男 senoh@ra2.so-net.ne.jp

甲虫ニュース 第134号

発行日 2001年7月31日

発行者 大林延夫

編集者 妹尾俊男(編集長), 長谷川道明, 川島逸郎, 奥島雄一, 鈴木 互, 吉富博之

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第2研究室 ☎03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 6,000円(一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社